

アート及び新美術館を軸とした中心市街地活性化に関する研究

令和 4 年 2 月

アート及び新美術館を軸とした中心市街地活性化に関する研究プロジェクトチーム

目 次

はじめに.....	1
第 1 章 中心市街地の現状と課題.....	2
1 中心市街地の活性化の方向性	
2 中心市街地の現状	
3 中心市街地活性化の課題	
第 2 章 アートのまちづくり—8 つの事例.....	20
1 アートのまちづくりとは何か	
2 アートのまちづくり—8 つの事例	
第 3 章 アート・新美術館を軸とした中心市街地活性化.....	42
1 ここまでの議論のまとめ	
2 提言—（仮称）はちのへまちなかアートプロジェクトの開催	
おわりに.....	53

はじめに

令和 3 年度、八戸市新美術館【以下、新美術館】が開館する。当施設の基本理念として、第一に、アートで地域の文脈を語り「八戸の美」に迫る美術館、第二に、アートが中心にある環境で「八戸の人」を育む美術館、第三に、アートの力を「八戸のまち」に波及させる美術館、の 3 点を掲げており、グローバルミュージアム事業、アートエデュケーション事業、アートのまちづくり推進事業を行う予定としている。

また、青森県立美術館や十和田市現代美術館などの県内美術館 5 館と「青森アートミュージアム 5 館連携協議会」を発足し、共同プロジェクトを進めるなど、アートを通じた全県的な地域の活性化に向け、様々な取組が進められているところである。

一方で、中心市街地に建設予定の公共施設も一通り完成した中、今後の施設間連携や地域との結びつきのあり方について、一層の議論が期待されるところである。「第 3 期中心市街地活性化基本計画」においては、「旧美術館跡地及び市有地の有効活用を図りながら、新しい美術館を建設することにより、来街者の増加や回遊性の向上に寄与することが見込まれる」とされていることから、新美術館の完成を機に、各文化施設の特徴を生かしながら、関係諸団体、中心商店街等と連携を深め、多様な結びつきが生まれることで、これまでにない相乗効果が発揮され、中心市街地の魅力向上につながるものと期待される。

特に、中心市街地活性化への寄与という点では、若者の事業への参加が重要である。教育としての観点に加え、高校生・大学生が積極的かつ主体的に関与する事業が推進されることで、若者の地元定着につながる効果も期待されるところである。

以上を踏まえて、第 13 弾では、新美術館の完成による「アートのまちづくり」の推進について、中心市街地文化施設との連携や中心商店街等の関係諸団体との結びつき、学生に向けた取組などのあり方をテーマとして研究を行うこととする。

第1章 中心市街地の現状と課題

ここでは、「第3期八戸市中心市街地活性化基本計画」【以下、本章では「第3期計画」】に依って、中心市街地の現状と課題を述べる。

1 中心市街地活性化の方向性

中心市街地の現状と課題を述べる前に、第3期計画に掲げられている中心市街地活性化の方向性について言及する。

(1) 将来像

八戸市の中心市街地は、伝統的な祭りの舞台、面影として残る城下町の町割りといった歴史と伝統が積み重なった場所である。

また、小路や横丁に代表される飲食店の集積に加え業務地が隣接しており、近年ではIT・テレマーケティング産業の企業進出により、比較的若い世代の仕事場としての性格も有している。

さらには、八戸ポータルミュージアム「はっち」や八戸ブックセンター、八戸まちなか広場、長根屋内スケート場では、様々な主体の参加による各種の事業が実施され、老若男女で賑わう交流の場となっているほか、新たに整備された新美術館の運営により、一層の賑わい創出が期待される。

このように多様な機能を持つ中心市街地が、八戸の生活文化が根つき、伝統を育むと同時に、多彩な人々の活動や交流により、新しい文化を生み続ける活力ある場であることで、八戸の「顔」として、誇りやアイデンティティの源泉となり、地域全体の元気や発展の原動力となるといった考えから、第3期計画では、中心市街地の将来像として「多様な機能が集まり、多彩な人々が行き交う、八戸らしい文化を育むまち」を掲げている。

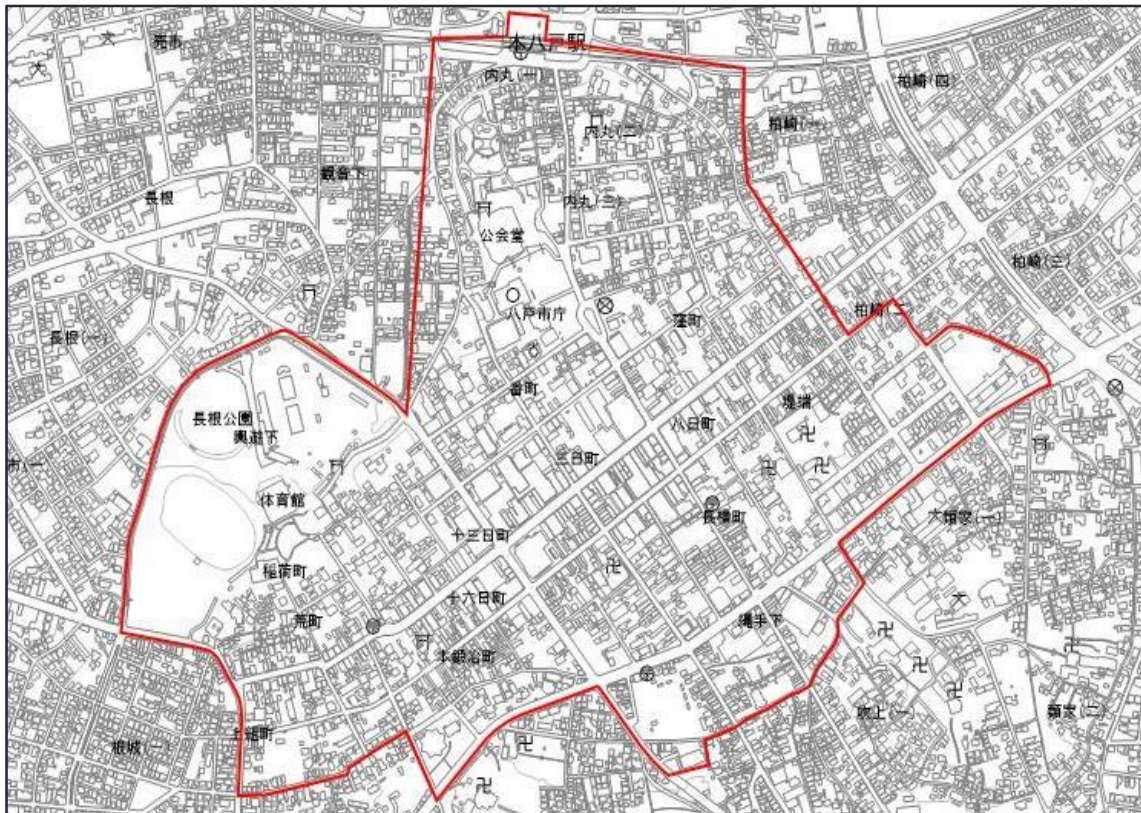
(2) 計画期間

第3期計画の計画期間は、平成30年12月から令和6年3月の5年4か月間である。

(3) 計画区域

第3期計画では、三日町、十三日町を中心とする都市機能の集積による賑わい創出を図る地区と、周辺の街なか居住の推進を図る徒歩圏内の地区で構成される約137haの区域（図1）を中心市街地区域として設定している。

図1 第3期中心市街地活性化基本計画区域



出典：八戸市

(4) 基本方針と重点施策

第3期計画の基本方針の考え方として、第1に、「文化・観光・スポーツ」を「都市機能」に包含し、「多様な都市機能が集積した活力あるまちづくり」を基本方針に、その振興による賑わい創出を図る、第2に、「商業」については、「都市機能」に含めつつ、官民一体となって魅力ある商店街とオフィス街づくりを推進し、地域経済の活力向上に資するため、「地域経済の活力向上」を基本方針とする独立した形での展開を図る、第3に、「居住・交通」については、「移動しやすい、暮らしやすいまちづくり」を基本方針に、居住誘導や交通の利便性居向上に取り組む、これら3つの基本方針とそれに基づく8つの重点施策により、賑わいの創出を図ることとしている。

分野	基本方針	重点施策
都市機能	多様な都市機能が集積した活力あるまちづくり	多様な都市機能の集積
		文化・観光・スポーツの振興
商業	地域経済の活力向上	起業支援と魅力ある商店街づくり
		魅力あるオフィス街づくり
		安全安心なナイトマーケットの充実
居住・交通	移動しやすい、暮らしやすいまちづくり	良質な居住空間の整備と居住の誘導
		暮らしやすい生活関連サービスの充実
		交通の利便性向上と快適な歩行空間の整備

2 中心市街地の現状

(1) 第3期計画における目標と数値指標及び目標値とその現状

中心市街地の現状を把握するため、まず、第3期計画において目標指標としている4項目について、八戸市で実施している第3期計画の定期フォローアップの資料を基に指標の推移を把握する。

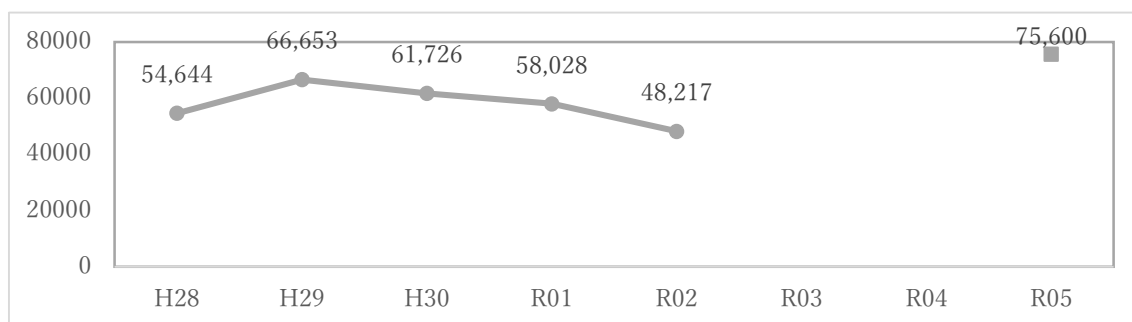
1) 歩行者通行量（平日1日と休日1日の合計・11地点）

三日町・十三日町の8地点及び花小路の3地点の合計11地点について、10月の平日及び休日それぞれについて9時から19時の歩行者数（自転車を除く）を目視で計数したものの合計を数値指標としている。

平成29年度実績66,653人を基準値とし、新美術館や八戸まちなか広場への来館及び花小路の整備による回遊者の増、企業誘致によるオフィス従業員の増などの効果を見込み、令和5年度の歩行者通行量を75,600人として目標値に設定している。

令和2年度実績は48,217人であり基準値を下回っている。主な要因としては新型コロナウイルス感染症の影響による外出控えの他、十三日町南側の沿道商業ビルからの小売店や飲食店等の撤退が影響しているものと推察されている。

図2：歩行者通行量の推移（単位：人）



出典：令和2年度 八戸市中心市街地活性化基本計画の定期フォローアップに関する報告

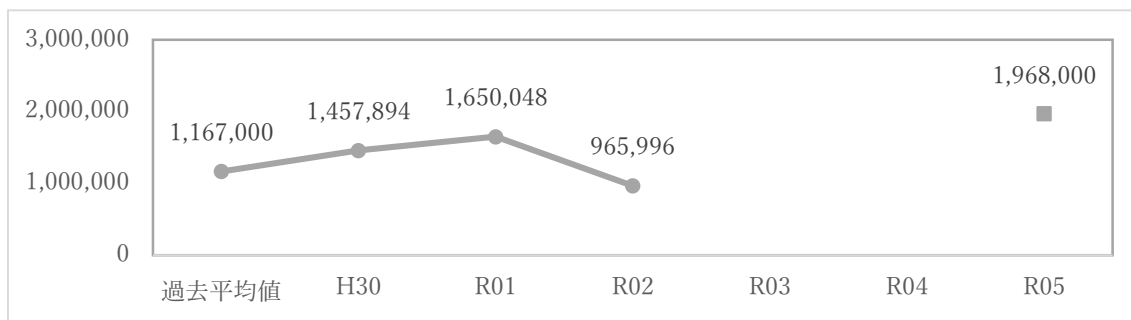
2) 公共施設来館者数

主要な公共施設である八戸ポータルミュージアム・八戸ブックセンター・八戸まちなか広場・長根屋内スケート場・美術館の5館の年間来館者数の合計を数値指標としている。

各施設の過去平均（八戸ポータルミュージアム：H27～H29の平均値、旧美術館：H26～H28の平均値、旧長根屋外スケート場：H27～H29の平均値、八戸ブックセンター：H29）の合計である1,167,000人を基準値とし、各種施設整備及び運営事業による来館を見込み、令和5年度の公共施設来館者数を1,968,000人として目標値に設定している。

令和2年度実績は965,996人であり基準値を下回っている。主な要因としては新型コロナウイルス感染症の影響による外出控えや拡大予防に伴う休館措置や施設利用者の定員制限等が影響しているものと推察される。なお、令和2年度は新美術館が整備中であるため令和2年度実績には美術館の来館者数が含まれていないことに留意されたい。

図 3：公共施設来館者数（単位：人）



出典：令和 2 年度 八戸市中心市街地活性化基本計画の定期フォローアップに関する報告

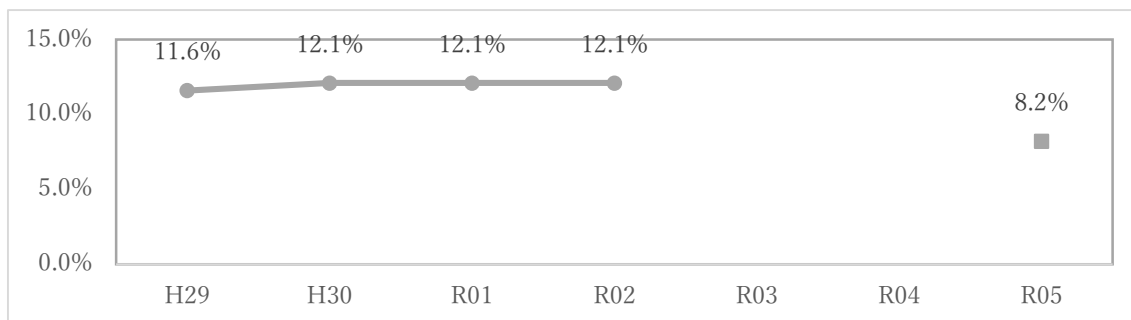
3）空き店舗・空き地率

三日町・十三日町・六日町・十六日町・八日町角地・廿三日町角地・番町の 1 階路面店・花小路に面した 1 階店舗の 2 月の現況を目視により確認して集計した比率を数値指標としている。

平成 29 年度実績の 11.6%を基準値とし、ディベルト八日町整備による 1 階路面床への店舗入居の他、創業支援等による効果を見込み、令和 5 年度の空き店舗・空き地率を 8.2%として目標値に設定している。

令和 2 年度実績は 12.1%であり基準値に到達していない。主要因としては新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、開業に対するマインドが抑制されているものと推察される。

図 4：空き店舗・空き地率（単位：%）



出典：令和 2 年度 八戸市中心市街地活性化基本計画の定期フォローアップに関する報告

4）中心市街地における人口の社会増減数

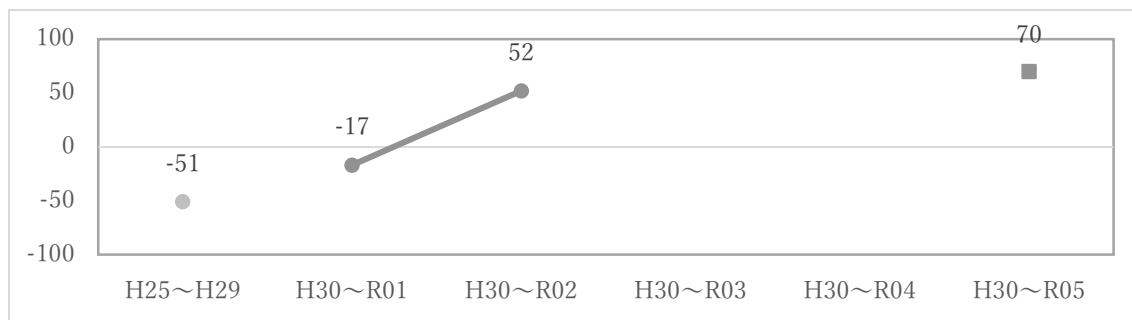
住民基本台帳を基に中心市街地の 9 月末時点における年間の社会増減数の積み上げを数値目標としている。

平成 25 年度から平成 29 年度までの社会増減数の積み上げとなるマイナス 51 人を基準値とし、ディベルト八日町や空き家再生事業による新たな入居による効果を見込み、平成 30 年度から令和 5 年度までの中心市街地における人口の社会増減数をプラス 70 人として目標値に設定している。

平成 30 年度から令和 2 年度までの実績はプラス 35 人であり目標値に近づいている。

令和元年から令和 2 年度の社会増減数はプラス 52 人であり、要因としては計画で見込んでいたディベルト八日町の供用開始による入居によるものと推察される。

図 5：中心市街地における人口の社会増減数（単位：人）



出典：令和 2 年度 八戸市中心市街地活性化基本計画の定期フォローアップに関する報告を基に筆者作成

（２）都市機能の現状

つぎに、中心市街地の都市機能について、主な文化交流施設等の現状を把握するとともに、令和 3 年 11 月に開館した新美術館の概要について整理する。

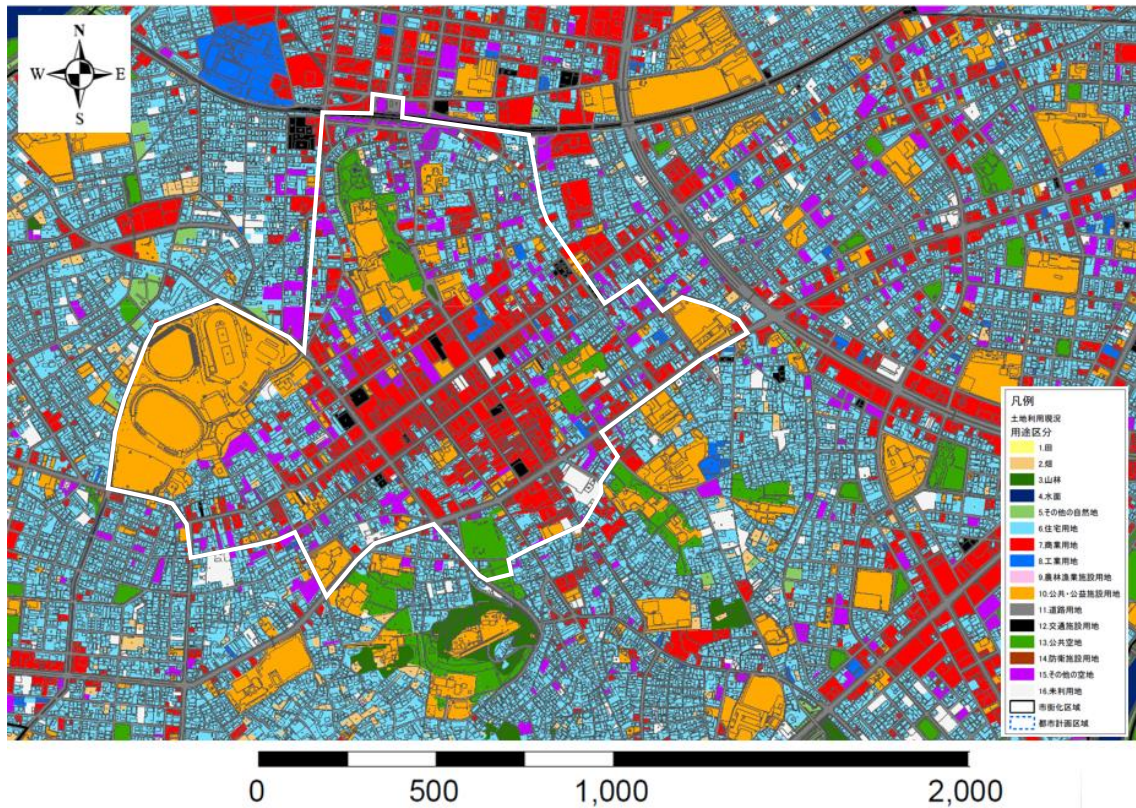
1) 土地利用

当市の中心市街地の土地利用について、都市計画基礎調査の資料を基に整理する。

中央部には、百貨店を主に商業・業務施設が集積している。北側には、市役所などの行政機能や公共施設、さらには中心市街地の玄関口である J R 本八戸駅が立地している。南側には、長横町や鷹匠小路など、中心市街地の特徴である横丁をはじめとする飲食店が立ち並ぶ繁華街や、多目的広場である長者まつりんぐ広場が立地している。東西には三日町・十三日町に隣接する形で、オフィスビルや金融機関が集積し、東側には長根屋内スケート場を有する長根公園が立地している。西側に立地する遊休施設である小学校跡地では、町内等が制作する三社大祭の山車小屋と広場の整備が計画されており、地域コミュニティと維持への効果が期待される。これら都市機能の集積した街区を取り囲むように居住区が形成されている。

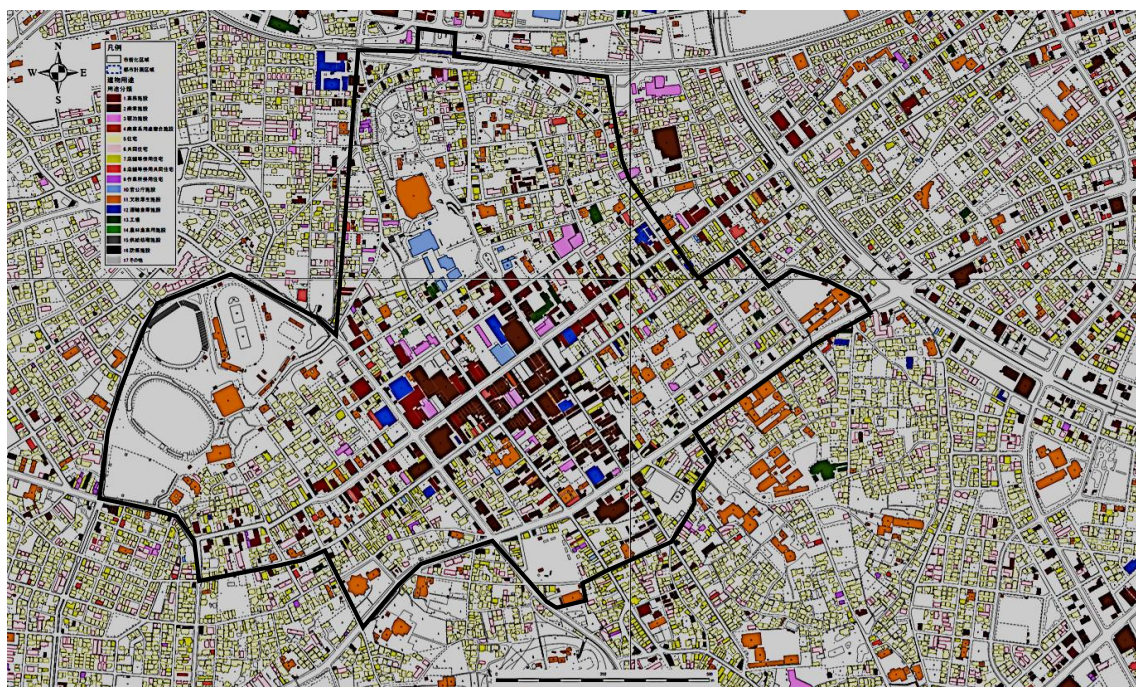
また、路線バスは、東西・南北方面に 13 系統運行され、1 日当たりの運行本数が 1,000 本以上あるなど、市内各所からの路線が集まる公共交通のターミナルとしての機能も有している。

図 6 土地利用現況図（白線は第 3 期計画区域）



資料：平成 29 年度都市計画基礎資料（白線筆者加筆）

図 7 建物用途別現況図（黒線は第 3 期計画区域）



資料：平成 29 年度都市計画基礎資料（黒線筆者加筆）

中心市街地の中央部には、八戸市公会堂、南部会館、八戸ポータルミュージアム、八戸ブックセンター、八戸まちなか広場、そして新美術館と、市民の文化・交流にかかわる施設が徒歩圏内（約 200m 範囲）に集積している。

その他、周辺には高等学校、専門学校が分布しており、通学者も主要な来街者となっている。

The map displays the following locations and facilities:

- Top Left:** 第二中学校 (Da-ni Jūhachū Gakko), 八戸小学校 (Yatsu Hsiao Gakko)
- Top Center:** 本八戸駅 (Hon-Yatsu Eki), 本八戸駅内郵便局 (Hon-Yatsu Ekin Nakari Yūbinkyō), 八戸警察署 (Yatsu Keisatsu-sho)
- Top Right:** 県立八戸工業高校 (Kenritsu Yatsu Kōgyō Kōkō), 江陽中学校 (Eiyō Jūhachū Gakko), イミルダ幼稚園 (Imiruda Yōchien)
- Center:** 三八城公園 (Sanpachō Kōen), 中央児童会館 (Chūō Jidōkaikan), 八戸市公会堂 (Yatsu-shi Kōeitō), 八戸市公民館 (Yatsu-shi Kōminkan), 八戸市庁 (Yatsu-shi Chō), 南部会館 (Nambu Kaikan), 八戸社会福祉専門学校 (Yatsu Shōkai Fukushi Senmon Gakko), 中央交番 (Chūō Kōban), 八戸市美術館 (Yatsu-shi Bijutsukan), 第二さえずりの森 (Dai-ni Saezuri no Mori), 安藤昌益資料館 (Andō Shōryoku Shiryōkan), 八戸ボータルミュージアム (Yatsu Bōtaru Mijūm), 八戸まちなか広場 (Yatsu Machinaka Hiroba), 八戸ブックセンター (Yatsu Būkk Sentā), 中央郵便局 (Chūō Yūbinkyō), 旧柏崎小学校跡地 (Kyū Hakuizaki Shō Gakko Atochi), 八戸クリニック (Yatsu Kurinikku), 街かどミュージアム (Machikado Mijūm), みどり幼稚園 (Midori Yōchien), 柏崎公民館 (Hakuizaki Kōminkan), 類家交番 (Rūke Kōban)
- Left Side:** 南売市保育園 (Nanuri-shi Hoikuen), 長根公園 (Nagane Kōen), 八戸市体育館 (Yatsu-shi Taiyūkan), 八戸市弓道場 (Yatsu-shi Kyūdōjō), 八戸市武道館 (Yatsu-shi Būdōkan), サンフラワー保育園 (Sanfurawā Hoikuen), 荒町郵便局 (Arawachō Yūbinkyō), 専門学校アレック情報ビジネス学院 (Senmon Gakko Arekku Jōhō Bishines Gakuen), 長者公民館 (Chōjō Kōminkan), 市立図書館 (Shiritsu Toshokan), たいなが保育園 (Tainaga Hoikuen), 根城こども園 (Nekigō Kidōen), 大杉平郵便局 (Oshikihei Yūbinkyō)
- Right Side:** 千葉学園高校 (Chiba Gakuen Kōkō), 県立八戸東高校 (Kenritsu Yatsu Higashi Kōkō), 長者まつりんぐ広場 (Chōjō Matsuringu Hiroba), ほうりん保育園 (Hōrin Hoikuen), 香森県八戸赤十字血縁センター (Kamori Ken Yatsu Akajūjūketsu Enkan Senter), 吹上小学校 (Fuegishō Gakko), 吹上児童館 (Fuegishi Jidōkan), 八戸地域職業訓練センター (Yatsu Chitai Shokugyō Kōshūkan Senter), 八戸職業能力開発校 (Yatsu Shokugyō Nōryoku Kaihatsu Gakko), 第一中学校 (Dai-ichi Jūhachū Gakko)
- Bottom:** 長者山 (Chōjō-san), 長者小学校 (Chōjō Shō Gakko), 福聚保育園 (Fukū Gō Hoikuen)

3) 文化交流施設の状況

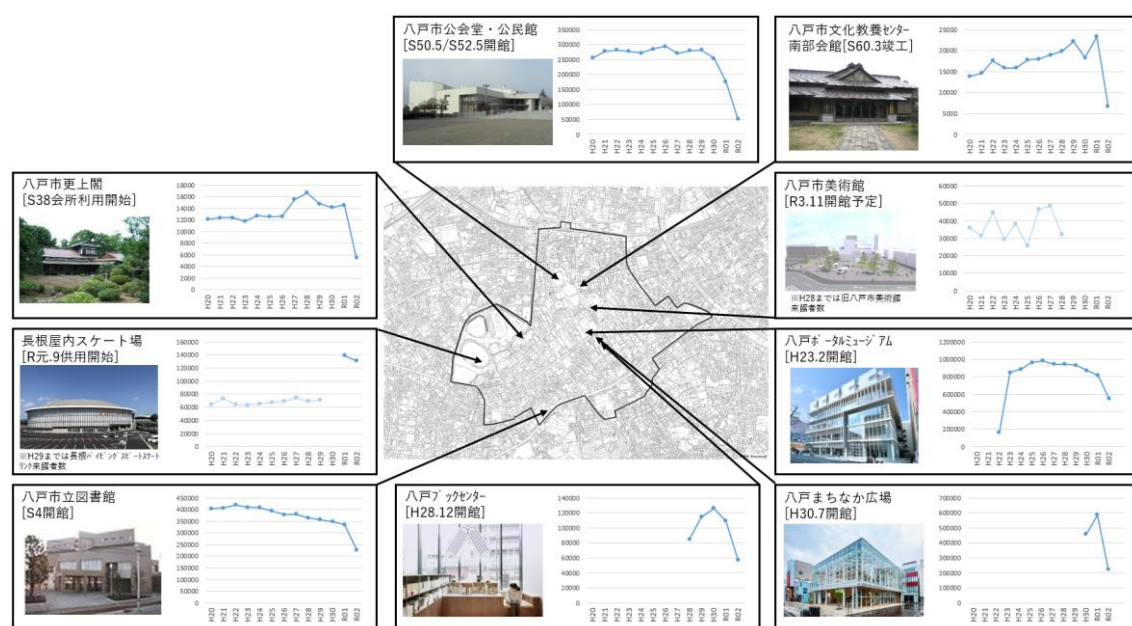
施設毎の年間利用者数（平成 20 年度（又は開館の翌年度）～令和元年度の利用者数の平均）は八戸ポータルミュージアムが約 91 万人、八戸市立図書館が約 38 万人、八戸市公民館公会堂が約 26 万人、南部会館・更上閣が約 1～2 万人となっている。加えて、平成 28 年 12 月に開館した八戸ブックセンターは約 11 万人、平成 30 年に開館した八

戸まちなか広場は約 52 万人の来館者となっている。また、従前の美術館には約 3～4 万人が来館していた。

一方、施設別の推移をみると、図書館は平成 23 年度から、八戸ポータルミュージアムは平成 27 年度から減少傾向となっている。また、令和 2 年度はコロナ禍による影響もあり、前年度に比べ図書館・八戸ポータルミュージアムでは約 3 割、その他の施設においても約 6 割の減となっている。

このような中、令和 3 年 11 月に開館した新美術館の利用者は、従前の美術館の約 2～3 倍程度に拡大すると予測しており、約 9 万人の来館を見込んでいる。

図 9 中心市街地の主要文化交流施設の位置と来館者数の変化



出典：八戸市提供データを基に筆者作成

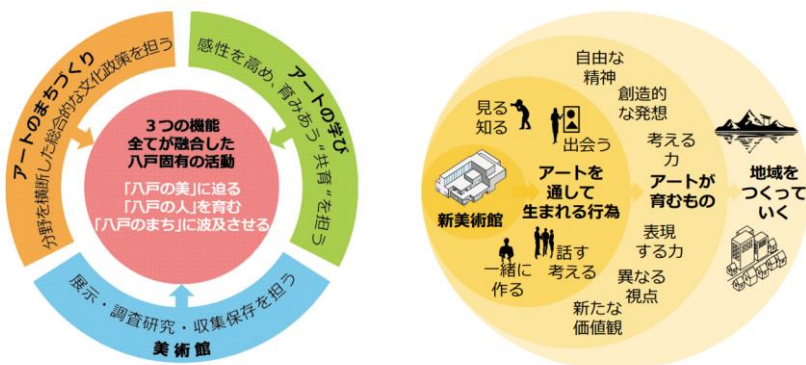
4) 新美術館の概要

ここで、新美術館のビジョン、施設の特長、具体的取組について、八戸市新美術館管理運営基本計画及び八戸市新美術館中期運営計画などの内容から整理する。

①ビジョン・活動イメージ

新美術館は「種を蒔き、人を育み、100年後の八戸を創造する美術館～出会いと学びのアートファーム～」というビジョンのもと、「美術館」・「アートの学び」・「アートのまちづくり」の3つの役割を融合させた美術館としていくことを活動イメージとしている。また、アートを通じた学びに重点を置き、アーティストや美術館スタッフと市民が対話し、一緒に何かを作る、考える、学ぶなど、人々が出会うことで生まれる体験・経験を提供すると同時に、それらが育むものを尊重・重視することとしている。

図 10 新美術館の活動イメージ



出典：八戸市新美術館管理運営基本計画

②施設の特長

施設は建築面積 3,095.05 ㎡、延床面積 4,881.18 ㎡の地上 3 階建鉄骨造である。「学びの拠点～ラーニングセンター～」の概念を活かした「ジャイアントルーム」と「専門性の高い個室群」の二つの特徴的な空間を有しており、新美術館リーフレットでは『展示室やスタジオなどの専門性の高い個室群と、エントランスやイベントスペース、プロジェクトルームを兼ねた様々な活動を支える巨大な空間「ジャイアントルーム」からできています。新しい美術館は従来の枠を越えて、学びの活動の場となることが目指されています。』と紹介されている。

図 11 新美術館の施設の特徴イメージ



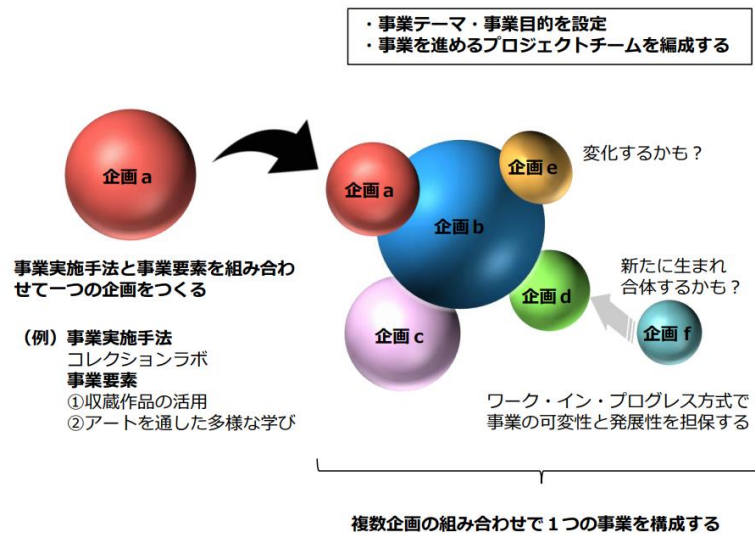
出典：八戸市新美術館基本設計

③具体的取組～独自の事業モデルの構築と実践～

八戸市新美術館中期運営計画では、令和 2 年度から令和 5 年度を計画期間とし、「アート」の学びを提供する八戸ならではの美術館としてのアイデンティティ確立と地域の牽引を戦略目標に、「アートを通じた学びの拠点をつくる」・「新しい活動や価値が生まれる土壌をつくる」・「クリエイティブ人材が集まる環境を作る」の 3 つのミッションを掲げている。

また、ミッション達成のための重点取組事項として、従来「事業」の枠組みに位置付けてきたものは事業を構成するための実施手法及び要素とみなし、設定した事業テーマのもとで様々な企画をつくり、複数企画の集合体として、企画の内容だけではなく、構成そのものも面白いと感じられる事業を実施する独自の事業モデルの構築と実践を示している。

図 11 新美術館の事業モデル

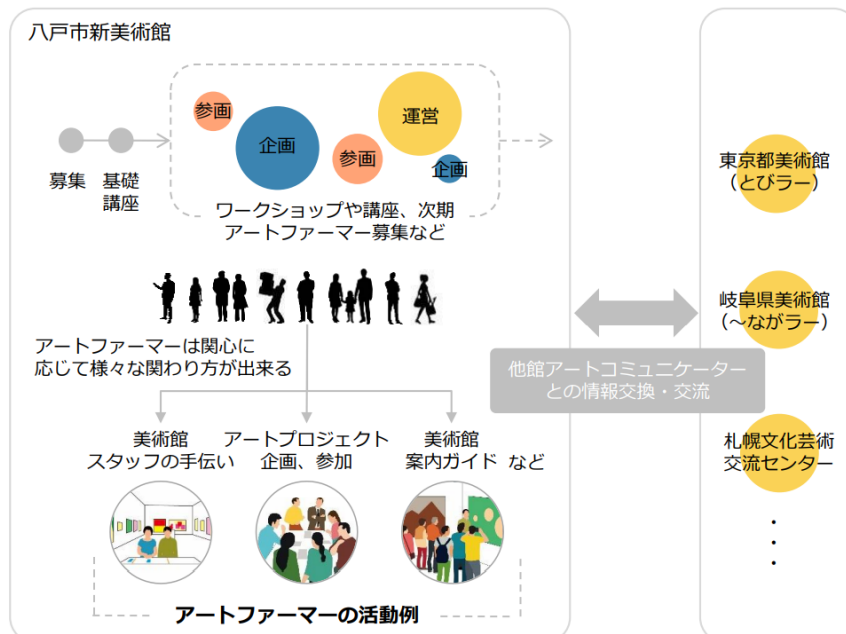


出典：八戸市新美術館中期運営計画

④ 具体的取組～アートを介した社会参画のプラットフォーム形成～

また、アートを介して様々な立場の人々が対等な立場でつながり、対話しながら、地域の様々な課題に向き合い、地域を作り変えていける場の形成を目指しており、このために、美術館活動に関わる市民を、アートでコミュニティを耕し育む「アートファーマー」と位置づけ、アートファーマーが美術館スタッフや専門家などとともに学び、美術と人との関わりを考え、企画立案し実践するなど、人とつながりながら、様々な経験ができる環境を整えるという新しい仕組みを取り入れることとしている。

図 12 アートファーマー活動イメージ



出典：八戸市新美術館中期運営計画

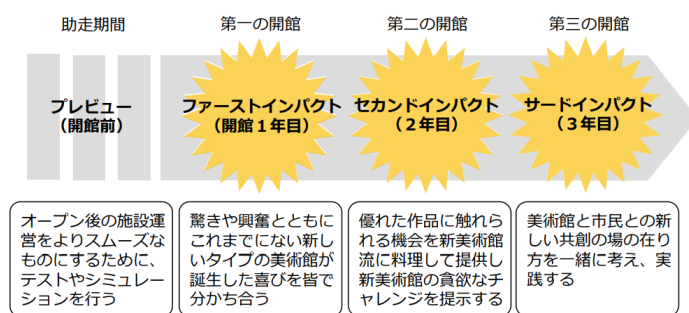
⑤ 具体的取組～小中高校や大学・高専との連携強化～

この他、小中高校との連携について、全国の効果的な美術教育の事例などを教員や学芸員・専門家等と一緒に研究するラボを開設し、美術館と学校をつなぎ効果的なプログラムを実践できる体制をつくること、また特徴的な活動を展開している市内の大学・高専の専門性と掛け合わせて、新しい価値や活動を生み出す「アート×○○」の新しい取組を展開することとしている。

⑥ 具体的取組～3回のオープンで打ち出す3つのインパクト+1～

これら新美術館の機能や特徴、魅力や可能性を余すことなく発信するため、グランドオープンを含めた3年間で「3回オープン」すると見立てて、「3つのインパクト」を打ち出し、さらにオープン前に助走期間（プレビュー）を設けることとしている。

図 13 3つのインパクト+1のイメージ

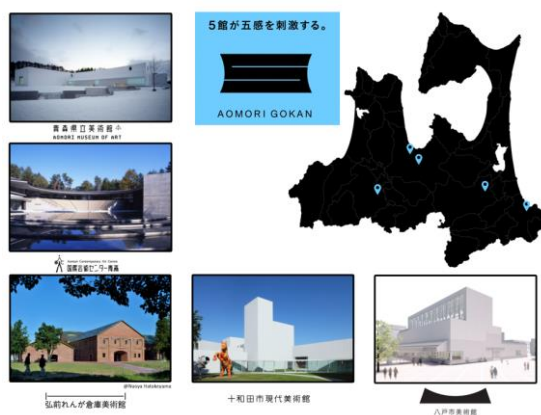


出典：八戸市

⑥ 青森アートミュージアム5館連携プロジェクト

新美術館及び弘前れんが倉庫美術館の開館を迎えることを機に、青森県内5つの美術館とアートセンター（青森県立美術館、青森公立大学国際芸術センター青森、弘前れんが倉庫美術館、八戸市美術館）が連携し、各施設が持つ特徴と県内のアートや文化をつなぎ、青森県の魅力として国内外に発信する青森5館連携プロジェクトが始動している。県民及び観光客による県内の周遊を通して文化、経済、教育など幅広い分野での地域振興を目的とし、有識者を招いたアートフォーラムや、共通のテーマで開催する企画などの実施を予定している。

図 14 青森アートミュージアム5館連携施設



出典：青森アートミュージアム5館連携協議会 Web の画像を基に筆者作成

(3) 人流の現状

改めて、中心市街地の人流について、各種データを基に推移や傾向等について分析する。

1) 中心市街地歩行者通行量調査

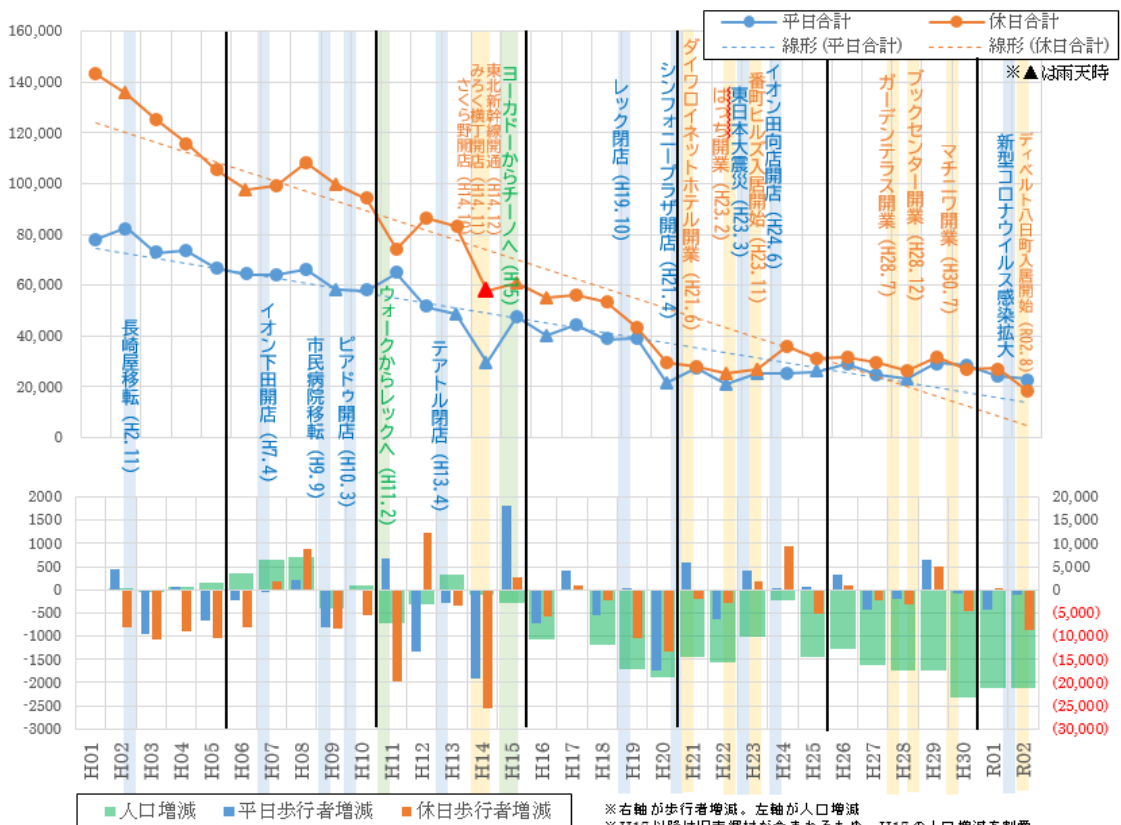
前述の2-(1)-1) 歩行者通行量について、平成元年度から令和2年度までの三日町・十三日町の8地点について休日・平日別に総数、時間毎、地点進行方向毎の推移について分析する。

①総数

休日・平日別の歩行者通行量の推移を見ると、第1期八戸市中心市街地活性化基本計画を策定する平成20年度までは、特に休日は毎年約1万人ずつの減少傾向であり、郊外ショッピングモールの開店の影響による来街機会の喪失と推察される。また、平成19年度以降平日と休日の歩行者通行量比率は1.1倍前後となり、その差がなくなっている状況である。

一方で、八戸ポータルミュージアムの開館した平成23年度から平成26年度までは平日休日共増加傾向であり、平成27年度以降についても令和元年度までは減少傾向が緩やかになっている。

図15 中心街8地点の休日平日別の歩行者通行量総数推移と前年度増減数

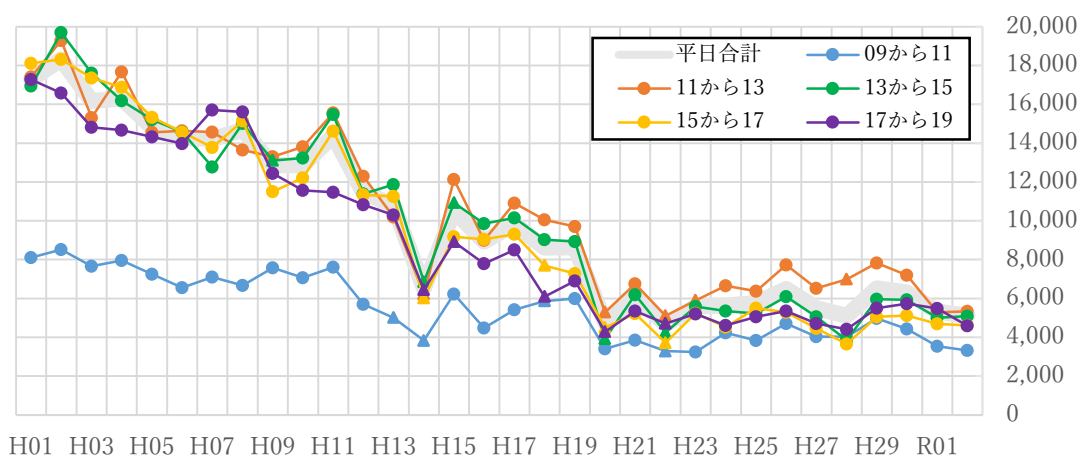


資料：八戸商工会議所及び八戸市

②時間別

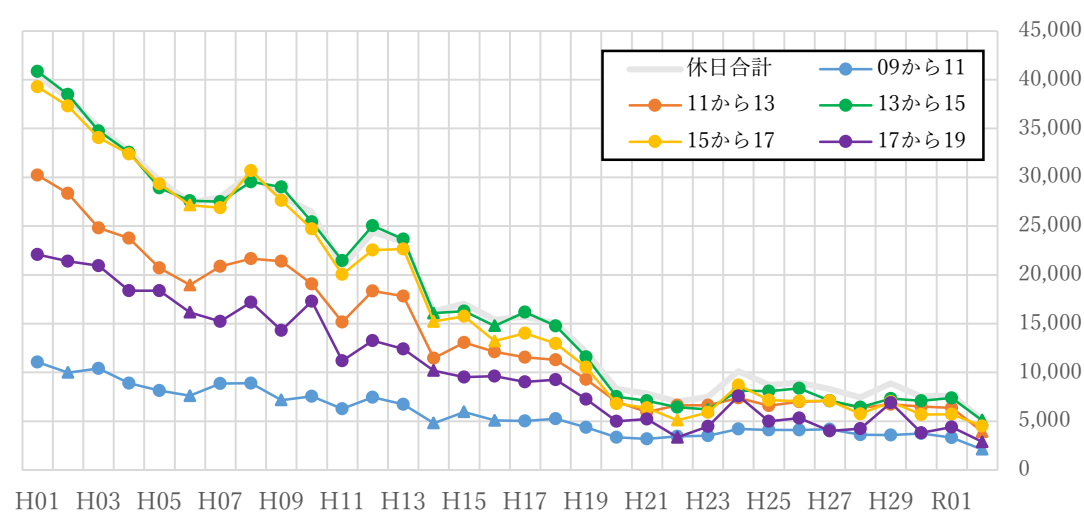
時間別（2時間毎）で見ると、平日は平成15年度から平成30年度の間で11時から13時の時間帯に歩行者通行量が多い傾向が見られる。休日は13時から15時の時間帯に歩行者通行量が多い傾向が見られる。年次傾向は平日休日共9時から11時を除き、全体と類似した減少傾向となっており、特に休日の13時から17時の減少が著しい。

図16 中心街8地点平日の2時間毎歩行者通行量の推移



資料：八戸商工会議所及び八戸市

図17 中心街8地点休日の2時間毎歩行者通行量の推移



資料：八戸商工会議所及び八戸市

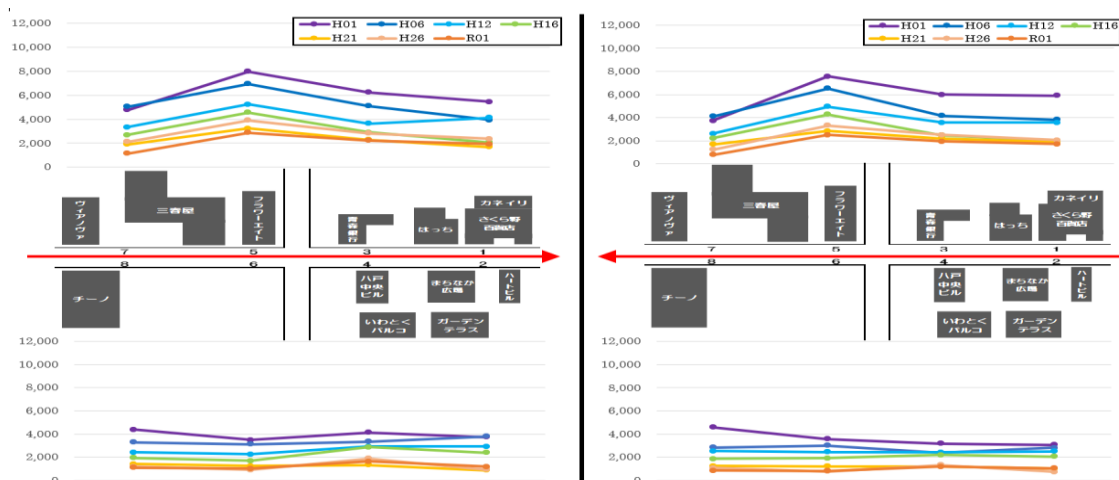
③地点方向別

地点別の傾向を見ると、平日・休日、三日町・十三日町共に南側より北側に歩行者が多く、特に十三日町の十三日町交差点側（図20及び図21の6の地点）が最も歩行者通行量が多い地点となる。年次傾向は、十三日町については令和元年度が最も歩行者通行量が少なくなっている一方、三日町側については、北側を見ると平成26年が平成16年・21年と比較すると多く、南側を見ると令和元年度が平成21年・26年と比較すると多い歩行者通行量となっている。

方向別の傾向を見ると、平日・休日共に西側から東側へ向かう歩行者通行量の方が若

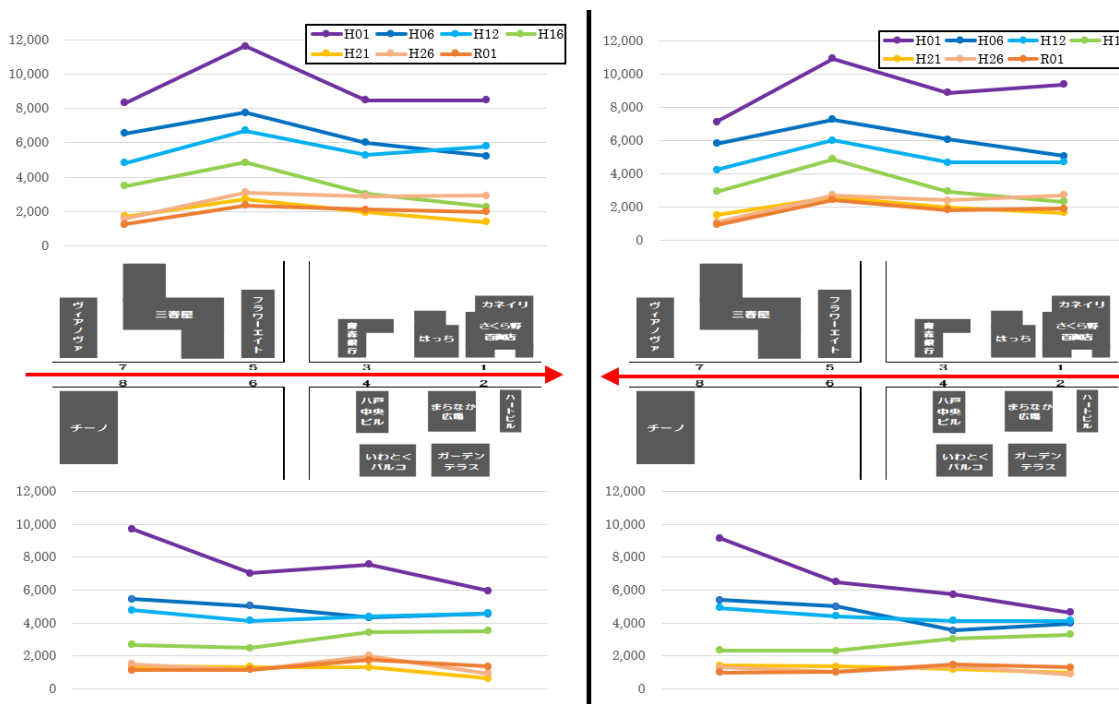
干多くなっている。

図 18 中心街 8 地点の位置図と平日における地点進行方向別 5 年毎推移



資料：八戸商工会議所及び八戸市

図 19 中心街 8 地点の位置図と休日における地点進行方向別 5 年毎推移



資料：八戸商工会議所及び八戸市

3) 企業データによる推計人口

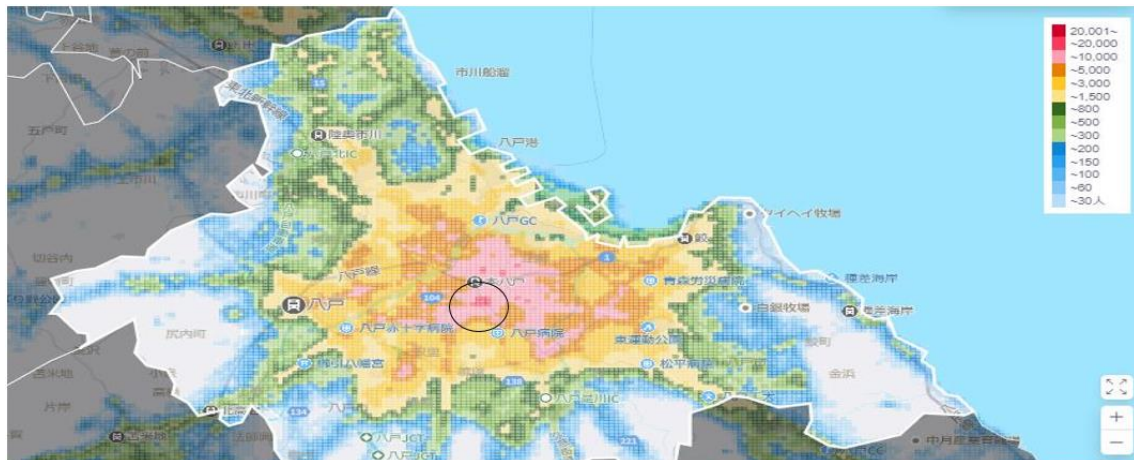
Yahoo!JAPAN の提供する DS.INSIGHT により、ビックデータを活用した令和元年 10 月以降の推計値から中心市街地の滞在人口について分析する。

①市全域と比較した中心市街地の滞在性

ひと月（令和元年 11 月）の日単位平均の滞在人口を基に作成したヒートマップを見

ると、中心市街地の滞在人口は市全域の中でも特に多いことが伺える。

図 20 令和元年 11 月の日単位平均の滞在人口ヒートマップ



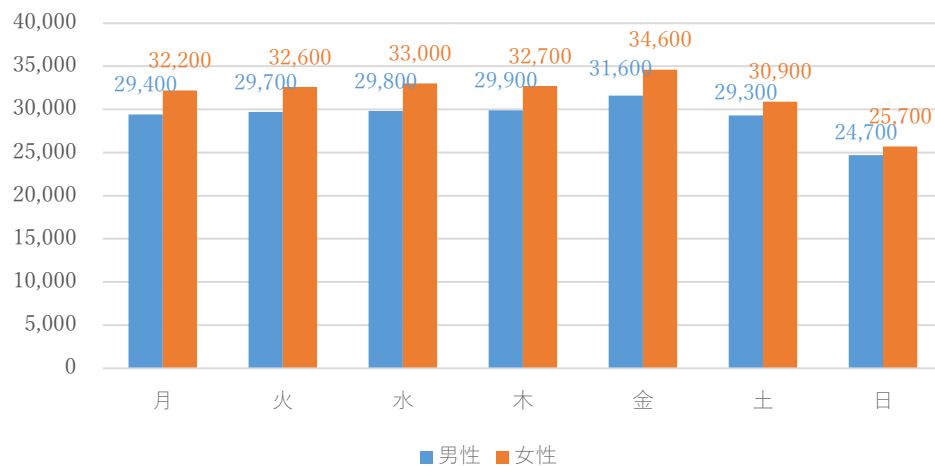
出典：ヤフー・データソリューション DS.INSIGHT

②曜日別中心市街地の滞在人口

@2021 ZENRIN CO.LTD.

令和元年 10 月から令和 2 年 9 月までの曜日別日単位平均の滞在人口を男女別に比較すると、男性より女性の滞在人口が多い。また曜日別で見ると、男女とも金曜日が最も滞在人口が多く、日曜日が最も滞在人口が少ない。また、土曜日の女性の滞在人口が平日と比べると少ない傾向が伺える。

図 21 曜日・男女別日平均滞在人口（令和元年 10 月～令和 2 年 9 月平均）



資料：ヤフー・データソリューション DS.INSIGHT

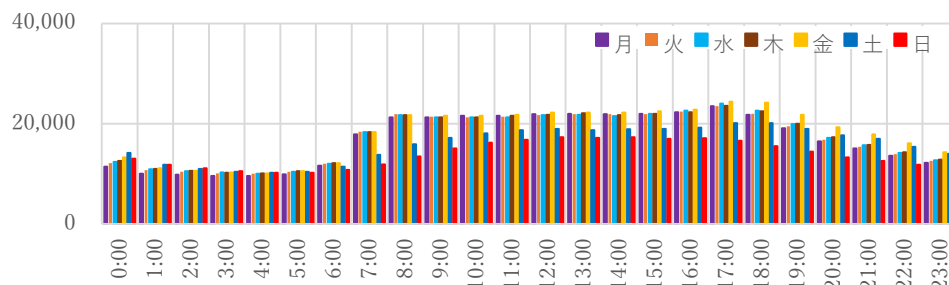
同期間の時間帯別曜日別の平均から傾向を分析する。

平日の変化を見ると、7 時から 8 時にかけて滞在人口が一気に増加し、8 時から 16 時までは大きな変動がなく、17 時から 18 時をピークに 0 時までに徐々に減少していく傾向がある。また、金曜日は 21 時から翌 2 時（0 時から 2 時は土曜日の傾向から判断）が他の曜日に比べて滞在人口が多い。

土曜日と休日の時間ごとの変化を見ると、7 時から 12 時にかけて滞在人口が徐々に増加し、12 時から 16 時までは大きな変動がない。17 時以降は土曜日と日曜日では若

干傾向が異なる。土曜日は金曜日と同様に 17 時から 18 時にピークを迎え、翌 2 時（0 時から 2 時は日曜日の傾向から判断）までに徐々に減少していくが金曜日以外の曜日と比べると滞在人口が多い。日曜日は 17 時から 23 時までに徐々に減少していく。

図 22 曜日・時間帯別平均滞在人口（令和元年 10 月～令和 2 年 9 月平均）



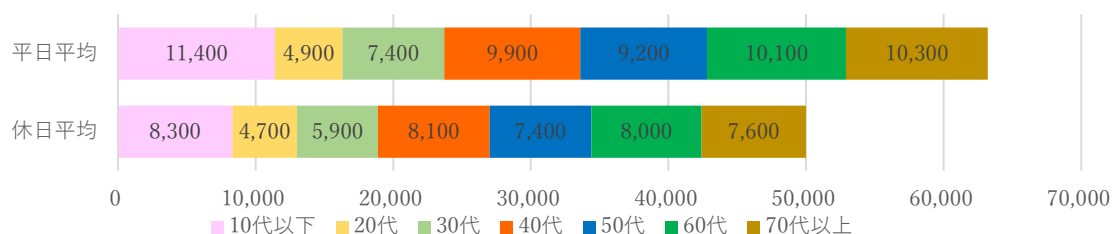
資料：ヤフー・データソリューション DS.INSIGHT

③年代別中心市街地の滞在人口

同期間の平日・休日別での年代別の平均から傾向を分析する。

年代別で全体を見ると、20 代が最も少なく、特に平日は他の年代の半分の滞在人口である。一方最も滞在人口が多いのは 10 代以下であり、特に平日は他の年代に比べて 0.5 割程度多い。40 代から 70 代以上では、50 代が若干少ないが平日・休日共同程度の割合となっている。平日と休日とを比較すると、20 代は大きな変化がなく、30 代から 60 代は休日が平日の 2 割減、10 代以下と 70 代以上は休日が平日の 3 割減となっている。

図 23 平日・休日平均の年代別滞在人口（令和元年 10 月～令和 2 年 9 月平均）



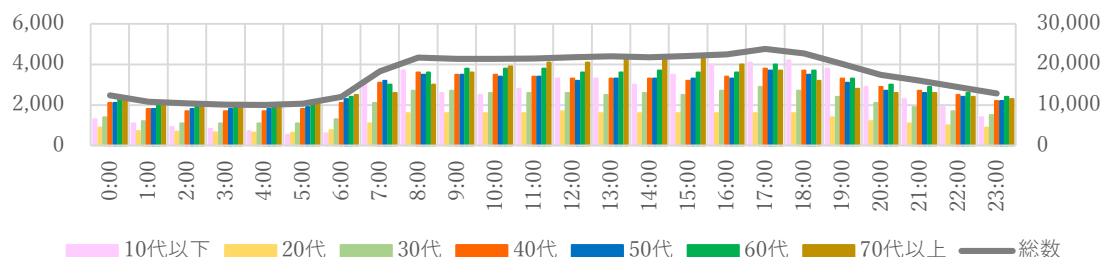
資料：ヤフー・データソリューション DS.INSIGHT

平日・休日の時間毎の年代別平均から傾向を分析する。

平日の変化を見ると 30 代から 60 代は平日総数の傾向と同様の変化をしている。20 代については 17 時から 18 時の滞在人口の増加傾向がないか概ね同様の変化をしている。70 代以上については、6 時から 14 時に向けて徐々に滞在人口が増加し、以降 0 時に向けて徐々に減少していく。10 代以下は平日の傾向が顕著であり、7 時から 8 時にかけて 500 人程度から 3,000 人強に一時的に増加し、9 時から 11 時にかけて 2,500 人程度減少。その後 12 時から 15 時まで 3000 人程度となり、15 時から 18 時をピークに 4,000 人程度に増加し、以降 0 時まで 1 時間当たり凡そ 500 人ずつ減少する。

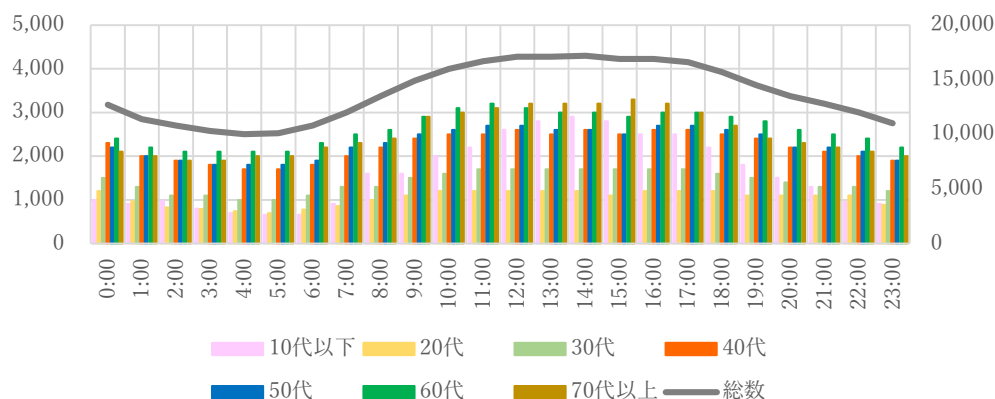
休日の変化を見ると、各年代とも概ね休日総数の傾向と同様の変化をしているが、40 代から 50 代では 11 時から 15 時に向けて滞在人口が減少する傾向がある。

図 24 時間毎年代別の平日の滞在人口（令和元年 10 月～令和 2 年 9 月平均）



資料：ヤフー・データソリューション DS.INSIGHT

図 25 時間毎年代別の休日の滞在人口（令和元年 10 月～令和 2 年 9 月平均）



資料：ヤフー・データソリューション DS.INSIGHT

3 中心市街地活性化の課題

これまで分析した結果を基に、八戸市の中心市街地活性化に向けた課題について述べる。

（1）来街機会の変化への対応

歩行者通行量や滞在人口の調査からも、中心市街地への来街は、平成初期の休日から平日に変わっていることは明らかである。また、コロナ禍の影響から来街機会が減少することは令和 2 年度の歩行者通行量や文化交流施設利用者数からも推察できる。このように、中心市街地を取り巻く情勢の変化に併せて来街機会も大きく変化してきていることから、その変化を多角的に捉え対応していくことが必要である。

（2）滞在機会が多い 10 代来街者への働きかけ

滞在人口の調査から、中心市街地には 10 代以下の若者が少なからず滞在していることが把握できる。中心市街地活性化への寄与には若者の事業への参加が重要であることは冒頭にも述べたとおりであり、こうした潜在的な若者の来街を好機として活かす仕掛けづくりが必要である。

（3）文化交流施設の活用と連携

八戸ポータルミュージアムや八戸ブックセンター、八戸まちなか広場の文化交流施設の建設とその運営が中心市街地の活性化に寄与していることは、歩行者通行量の下げ止

まりなどからも一定の効果があつたことが見られる。一方で施設来館者数を見ると、八戸ポータルミュージアムや八戸ブックセンターでは開館から3～5年をピークに減少傾向が見られることから、その効果を持続させるための施策が必要である。また、各施設の開館による他館への波及効果は、施設来館者数の数字上では表れていないことから、新美術館による来街機会を他館にひいては中心市街地の回遊性の向上につなげようとするのであれば、各施設と連携した取り組みが必要である。

第2章 アートのまちづくり—8つの事例

1 アートのまちづくりとは何か

静岡県文化財団に設置された「アーツカウンシルしずおか」アーツカウンシル長の加藤種男氏は文化芸術の意義について次のように述べている。

(https://artscouncil-shizuoka.jp/about/about_artscouncil/、2022年1月26日アクセス)

「芸術文化は人々に感動や生きる喜びをもたらすなど、それ自体に価値がありますが、地域課題や社会課題に対しても、人々に思いもかけない発想で解決の糸口を見つけさせる力があります。芸術文化の社会的な役割は、地域の活性化や課題解決に向けた取り組みを、より創造的にしていくことにあるといえるでしょう。

お祭に代表されるように、芸術文化は本来、私たちの生活の中に根付いたものでした。自分たちの地域で、みんなで作ってみんなで楽しむお祭りは、すべての人が作り手となります。そこでは、交流と包摂こそが重要であり、さらには他者との違いや混交を創造の源泉ととらえて楽しむものでした。

けれども、近代から現代にかけての芸術文化のあり様は、作り手であるアーティストと受け手である鑑賞者を分離し、芸術文化が一部の人の特別なものであるという誤解を生みしました。

近年、アート・プロジェクトを通じ、芸術文化は社会とともにあることが再確認されるようになり、作り手であるアーティストと、これまで鑑賞者であり受け手とされてきた人々との関係は、さまざまな形に広がってきました。

例えば地域芸術祭では、アーティストの作品制作において住民が欠かせないパートナーとなっています。必ずしも専門的な表現手段を持たなくても、アーティストの力を借りて想いを表現する。こうした活動は、地域社会の創造性を育み、生き方や社会の在り方について、新しい見方を示してくれます。それは、地域社会が持続していく力となるでしょう。

すべての人が自己表現を社会化していくことで、超少子高齢社会の課題解決に取り組むことができます。

また、起業家精神を持った人々が、まだ誰の目にも見えていない社会の変化を顕在化させ、新しい価値を創造するアーティストの存在に注目しているのも、時代のニーズを先取りし常に進化し続けなければならない企業にとって、アーティストこそ最もふさわしいパートナーだと考えているからでしょう。」

2 アートのまちづくり—8つの事例

(1) 新潟県十日町市「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」

1) 「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」(以下、「大地の芸術祭」)とは

「大地の芸術祭」は越後妻有地域(新潟県十日町市・津南町)を舞台として3年に1回開催される(世界最大といわれる)国際芸術展である。これは1994年の「ニューにいがた里創プラン」をきっかけに始まったものである。

2) 概要

2000年に第1回目が開催され、2018年までで7回開催されている(ちなみに2021

年の開催は 2022 年に延期された。<https://www.echigo-tsumari.jp/>より<2021 年 8 月 24 日アクセス>)。来訪者は第 1 回目が 16 万人であり、毎回増加している。年齢層は 20 代から 40 代で全体の 70%を占めている。地域別来訪者は関東地域が 43.4%、新潟県内が 29.9%である。作品活用のため、季節ごとのイベントも開催している。

3) 事業費の概要

歳入については第 1 回・第 2 回については県の補助金と市町村の負担金が大部分であった。3 回目以降は、国庫補助金の他、企業等からの寄付金・協賛金などを主な収入としている。6 回展の歳入 (6 億 2,430 万円) のうち、国庫補助金 2 億 2,799 万円、市町村負担金 1,000 万円、寄付・協賛金等 1 億 3,830 万円、その他 1 億 5,790 万円である。7 回から 8 回にかけては「文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業」の補助金を活用する。歳出は 6 回展 (6 億 2,365 万円) の内訳で、ディレクター委託費 2,000 万円、芸術祭運営委託費 5 億 2,596 万円、その他 7,769 万円である。

4) 運営・推進体制

「大地の芸術祭実行委員会」を組織し運営を行っている。メンバーは、新潟県、十日町市、津南町、市内経済団体、観光・旅行関係団体、教育関係団体、市民活動団体などである。施設や作品の管理等は、NPO 法人越後妻有里山協働機構が行う。

5) 開催にあたり大切にしている視点・工夫している点

「大地の芸術祭」の目的は、地域活性化であり、そのため、地域潜在資源 (棚田・里山などの自然資源、空き家・廃校などの集落資源、民芸・工芸などの文化資源) を現代アートを活用して、新たな視点から見つめなおし、その価値を再発見することである。展示作品はワークショップなどを通じて作家と地域住民と一緒に作成する。地域住民がアートに触れ合う機会を創出するとともに、外部の人々と交流する場を生み出している。

また、来訪者が元気になることも意図している。芸術祭の拠点施設で提供される食事は地元食材を活用しており、地域住民が地域の食を再発見する機会を提供している。さらに「災害からの復興と再生」という視点も取り入れている。長野県北部地震や新潟県中越地震で倒壊・半壊した施設の再生を行った。

地域住民だけでは手が足りなくなるため、大学生などによる「こへび隊」を組織し、芸術祭の運営、作品のメンテナンス、ツアーガイド、除雪作業、農作業などを担っている。

6) 開催効果、地域・市民の変化

作品展示をきっかけに、ごみの不法投棄が減少した、従来のお土産品のパッケージにアートの要素を入れたデザイン変更により売り上げが伸びたなどの効果が報告されている。また「こへび隊」に参加した大学生が卒業後も引き続き活動に参加したり、十日町市に移住する、起業する人たちも生まれた。

当初は参加地域が 25 地域にとどまっていたが、芸術祭による変化を目の当たりにして、6 回展では 110 地域が参加した。また経済効果は近隣自治体にも波及している。

7) 継続にあたっての課題

公共交通機関が少ないこと、「こへび隊」への新規参加者数が減少していきいていること、継続的な財源確保の困難さ、担い手の確保、観光受け入れ態勢、芸術祭効果を地

域産業活性化にどうつなげていくか、などである。

8) 成功要因

藤野他【2020】では「大地の芸術祭」の成功要因を次の4つにまとめている。

第一に、開催目的が、当初から一切ぶれていないこと、第二に地域活性化には、地域に関わる人々が活性化することが必要である考え、様々な取組を進めていること、第三に、芸術祭（アート）を「かすがい」として、「人と人との交流」を生み出していること、第四に芸術祭（アート）を通して、地域住民の中に「自分たちが、自分たちの地域を、自分たちの手でどのようにしたいか」を考える素地ができたこと、である。

（2）アーティストが紡ぐ価値創造と交流

本項では、われらが八戸ポータルミュージアム（はっち）を拠点とするアートプロジェクトに関わった3名のアーティストの事例を通して、まち育ての営みにおけるアートあるいはアーティストの役割や意味を、考えてみたい。

1) はっちの施設活用事業計画のなかには当初から文化芸術活動振興事業が位置づけられ、設計計画にはアーティスト・レジデンスの機能が組み込まれていた。計画の初期段階にこの施設のソフト計画業務委託を受けた事務所（teco LLC）は平成20年度から施設開館に向けたプレ事業として積極的に現代アートを活用したまちなか活性化のプロジェクトの展開を試みた。tecoが募った市民主体のソフト事業のしくみづくりを目的としたワーキンググループ（hpm 市民ワーキング）のメンバーらはこうした企画のサポーターとなり参加者となっていたが、市民ワークショップ等でまちなかでの活動に活性化していた学生たちが、誰よりこれらの企画に敏感に反応し楽しんでいる様子であった。

アートをテーマにしたまちづくり／地域おこしの企画は近年各地で活発に展開されてきた。はっちのソフト計画のアドバイザーとして招かれた企業メセナの第一人者加藤種男氏（当時、アサヒビール芸術文化財団事務局長、横浜市芸術文化振興財団専務理事）は文化による都市再生のために、市民の主体的参加のシステムを作る仕掛け人（専門家）とアーティストの発想力が必要であるという注1）。

また十和田市現代美術館で特任館長を務めた小林央子氏はかつて講演注2）のなかで十和田におけるアートプロジェクトの要件や特性として以下の6項目を挙げていた。①“臨界状態”をつくる、②若いアーティストを外から呼んで（Uターンも可）、③滞在する、④まちなかにはみ出す、⑤参加して楽しめる、⑥事前のアピールが難しい。

ここで“臨界状態”とは、地域に変革をもたらすような文化芸術的な活性状態の連鎖反応の喩えと解釈できるが、アートはじめさまざまな創造力をもって地域の文化的・精神的停滞に風穴を開けるエネルギーにしていくことが重要であろう。

○安岐理加「風のひかりのみち」～本八戸駅通り「光のプロジェクト」

美術家・安岐理加氏による「風のひかりのみち」というプロジェクトが、平成20年12月20～25日に開催された。氏は各地に滞在型して立体作品、写真、映像、文章、音などを媒体に表現活動を行うアーティストである。この企画は、まず市内の児童館・公

民館等数ヶ所で子どもを中心としたワークショップを実施し、ペットボトルのリサイクル工作で風車を作る。のべ百数十人のワークショップ参加者による風車を野外にインスタレーション作品として展示する。風車にはモーターと LED が接続されていて、風車が回ると LED が光るという仕掛けである。降雪後の晴天の夜、市庁近くの三八城公園でその鑑賞会が実施された。実は八戸の冬の夜間は概して風は弱く、氷点下 10℃程度の屋外で、ときおり気まぐれにそよぐ風に風車群がボウと赤く光る幻想的な光景をじっと見守った。かつて八戸の厳冬の夜に誰が風を心待ちにしたことだろう。しかし参加者たちは 1 時間以上も冷え切った身体とは裏腹にときめく思いで非日常的なひとときを過ごしたのであった。

それはウインド・ファーム群のようだった。外からやってきたアーティストは、地元の人間にとっては寒く煩わしいだけの風を、心のエネルギーに換えてみせたのである。

また、八戸高専河村研究室では、市が開催する中心市街地活性化市民ワークショップでの提案から 2000 年代後半の数年間、冬季に本八戸駅通りに簡易なイルミネーションを設置するプロジェクトを仕掛けていたが、毎年続けるうちにマンネリ化していくことを自覚しながらもなかなか新しいアイデアが生み出せずにいた。そこで安岐氏に指導をお願いし、2011 年度の冬には、八戸高専生と安岐理加氏のコラボレーションプロジェクト、本八戸駅通り「光のプロジェクト」が実現した。アーティストのアイデアに敬服させられるとともに、当時参加した学生たちには非常に貴重な、思い出に残る経験となった。

安岐氏は、さらに創作の方法を大きく変革させ、オーラスヒストリーの収集と記録やワークショップの開催等を中心とした土着的な活動を発展させていった。その後八戸では鮫・湊地区の漁師を取材するプロジェクト「うみのはなし」（2013 年）を手掛けた。

○山本耕一郎「まちのうわさ」→「まちぐみ」への展開

山本耕一郎氏は 2010 年の八戸ポータルミュージアム（はっち）開館準備段階に、はっちオープニング事業「八戸のうわさ」などを手掛けたコミュニティ・アーティストである。他都市でうわさ PJ をみた八戸市職員が山本氏に依頼をしたことから始まる。「八戸のうわさ」では山本氏が自ら商店等に出向いて取材を行い、漫画の吹き出しのようにデザインされた無数の「うわさ」を町中に展示した。そこから興味を持って、その後はっちでの「うわさ」制作作業に参加した者もいる。山本氏自らが現場であるまちなかに出向くため、地域住民に顔を知られる存在となった。

山本氏は当初、外来のアーティストであったが、2012 年に八戸市南郷区に移住し、南郷アートプロジェクトなどにも関与した。さらに八戸出身の女性と結婚、お子さんも誕生し、今やすっかり八戸の住民となっている。

「まちぐみ」ははっちが開館して 4 年が経過し徐々に落ち着いたところで、本来の目的である中心市街地活性化を目指すための企画提案を山本氏に依頼し、結果「八戸のまちなかに『なんか楽しそう』を作り出し、一人ひとりの『やってみたい!』をカタチにしながら、まちぐるみで八戸市街地＝『まち』を元気にしていく市民ボランティア集団」として 2014 年 10 月に設立された。山本氏が「組長」であり、誰でも簡単に「組員」になれる（組員は 2020 年 3 月現在 492 名）。

生田ほか（2020）では、八戸の中心市街地活性化の拠点施設としての「はっち」と、そうした拠点を足場に中心市街に働きかける主体としての市民集団「まちぐみ」の活動の関係を、①整備された拠点施設の利用状況と中心市街地における事業範囲を分析する空間的な視点、②市民集団について活動の場と交流に着目した視点、③市民集団と自治体、一般市民など各主体の社会的関係、の3つの視点から分析、考察している。ただその分析の中では触れられていないことが、『なんか楽しそう』＝言語化できない面白さを持続的に発信し、集団として開かれた求心力を発揮し、更新し続けるエネルギーは、アーティストの文化創造力に負うところが大きいということである。

経産省（2017）ではこの構図を「市民生活に密着した運営と専門人材（アーティスト）とのコラボレーション」と呼んでいる。ここでのアーティストの存在は、彼が創作する何らかのわかりやすい作品（コンテンツ）への評価ではなく、彼の持つ創造的かつ実践的なエネルギーとコンセプト、そして紡ぎ出される関係性——それこそが無形の創造として評価されている。

○写真家・浅田政志と野田村写真班

木村伊兵衛賞受賞写真作家の浅田政志氏は、2011年3月11日、八戸市の人々のポートレート写真を展示する「八戸レビュー」をはっちで開催していた。

同年2月11日に開館したばかりのはっちは、オープン1か月の震災発生直後から避難所となった。当初浅田氏は八戸でボランティアを申し出たが、「もっと被害の大きなところに行った方がいい」と助言を受け、八戸での撮影プロジェクトを通じて懇意になった友人らと車で沿岸を南下し、岩手県野田村にたどり着く。

そこで出会ったのが、被災写真を拾い集め、洗浄し、元の持ち主に返却しようとする地道な活動であった。ユニークな家族写真を作風とする写真家・浅田氏は、生々しい被災地の惨状に自らのカメラを向けることはなく、津波で傷ついた無数のスナップ写真を黙々と大切そうに洗い続けていた。

以来、浅田氏は10年以上、他の津波被災地も巡り、被災写真の修復・返却作業と関わるようになる。2020年秋に全国公開された映画『浅田家！』（中野量太監督）の後半は、脚色はあるもののかなりリアルに浅田氏と八戸の若者たちと野田村の交流のものがたりである。コロナ禍で未だイベント開催や人の移動に障害の多い今秋にも、浅田氏は八戸新美術館のオープニングイベントに招かれるのと併せ、移転が予定される野田小学校の児童たちの記念写真撮影プロジェクトに応じてくれ、若い八戸市民を中心とする野田村写真返却グループとの交流も続いている。こうした交流は、大都市圏では生まれにくいものであり、当事者にとっては他に代えがたい価値を持つ。

2) 拠点と活動のダイナミズムを生む関係

この10年間、はっちを拠点として八戸に滞在し、市民と顔の見える交流を続けてこられた何人ものアーティストが、さまざまな形でわれわれにもたらしてくれた価値について、もっと評価し、地域としての受け手を広げていかなければと考える。本項で紹介した3例は、筆者が個人的に関わり印象深かったプロジェクトであったということに過ぎず、他にも地域に深くコミットした骨太なプロジェクトがいくつかあった。その裏で

はやはりアーティストと地域住民との創造的交流がいくつも生まれていたであろう。

はっち建設前から始まった八戸市内の一連の創造的活動は、行政主導で仕掛けられ、マネジメントされてきたものであるが、大学等の教育機関や文化的感度の高い市民を巻き込んで、十数年間のあいだにダイナミックに展開してきた。また日頃行政とは一線を画し独自にユニークな活動をしているいくつかのグループや個人が、直接・間接に刺激されて活性化する状況も目にしてきた。活動自体はもともと続けられてきたものであろうが、さまざまな活動主体がネットワークを広げようとする過程で、接点も増えたということであろう。

しかし一方で、マチニワやブックセンター、新美術館等のそれぞれ魅力的な拠点が続々と開設されていくに従い、全体を見通しての地域の文化的活性をデザインすることが必要と思われる。アートプロジェクトはアーティストの力のみによって成立するわけではない。

はっち建設の前哨となる「都心地区再生市民ワークショップ」～「中心市街地活性化市民ワークショップ」を指導した北原啓司弘前大学教授は、提唱する「まち育て」の説明としてしばしば行政と市民を、料理を「つくる人」と「食べる人」の関係に譬える。これに倣えば、まち育てにおけるアーティストの役割は、地域の素材を調理する腕の良い料理人といえるのではないだろうか。素材はさまざまな地場の資源であり、そのもの自体にブランド力がなくても、ひと手間加えて大きな文化的価値が付加され、ハレの御馳走になるような料理をつくる人。またそれは厨房に籠る料理人ではなく、NHKの料理バラエティに登場する料理研究家・きじまりゅうた氏のようにたべる人と対等でオープンな料理～食事のプロセスを楽しめるのがコミュニティ・アートの基本的なイメージではないか。

ただ、こうした視点で、コミュニティ・アートや、アーティストが地域にもたらす文化的な付加価値の評価は、教育や教養の評価と同様、難しい。

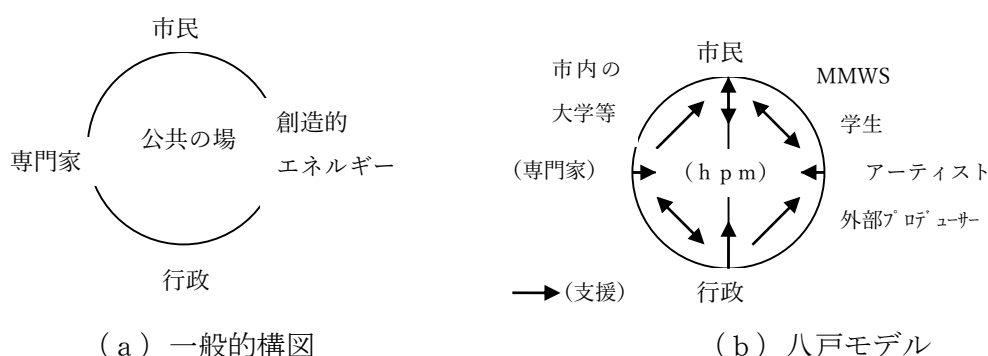


図 26 アートを活用したまち育ての構図

あらためてアートを活用したまち育ての主体の構図を示したのが図 26 である。(a)において「創造的エネルギー」となる主体は、活動家でも若者でも「風」の役割を果たす者なら置換可能であるが、文化的な革新性を持つアーティストであればより持続的である。重要なのは、市民と行政が協働で新しい公共の場を創っていく上で、閉じた環に

ならず、「風」に対して開放されたしくみ、あるいはその刺激によって自己変革（活性化）できるしくみをどのように具現化していくか、ということである。

注

1) 平成 21 年 3 月 30 日（月）に hpm プレ事業として開催された加藤種男氏の講演会「八戸ポータルミュージアムへの提言——人と人、事と事とのネットワークづくりによる地域活性化」

2) 2009. 10. 15. 青森県都市計画マスタープラン公開勉強会（青森県主催、於：十和田市商工会議所）における事例紹介「アートによるまちづくりプロジェクト」

参考文献

河村信治：八戸市中心市街地活性化市民ワークショップと八戸ポータルミュージアムに関連するまち育て活動，2010 年度日本建築学会大会（北陸）都市計画部門研究協議会論文集，pp. 82-85，2010/9.

猪股希美：本八戸駅通り「光のプロジェクト」の評価に関する研究，平成 23 年度八戸工業高等専門学校建設環境工学科卒業研究，2012/3.

生田尚志・堀越まい・佐藤将之：中心市街地活性化を目的とした拠点施設の運営と市民集団の活動展開による参加の形態—八戸市によるポータルミュージアム「はっち」と市民集団「まちぐみ」を事例として—，日本建築学会計画系論文集，85 巻 777 号，pp. 2363-2373，2020/11.

経済産業省：街元気・まちづくり事例集—新たな雇用と投資の喚起をめざして—（ver. 1. 0），2017/3

https://www.meti.go.jp/policy/sme_chiiki/town_planning/downloadfiles/h28_jirei.pdf
藤本智士（文）・浅田政志（写真）「アルバムのチカラ」，赤々舎，2015.

映画「浅田家！」の原案『アルバムのチカラ』再び AERA. dot 2020/09/26

<https://dot.asahi.com/dot/photoarticle/2020092300098.html?page=2>

宮前良平「復興のための記憶論：野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー」，大阪大学出版会，2020.

北原啓司「「空間」を「場所」に変えるまち育て—まちの創造的編集とは—」，萌文社，2018.

藤浩志・AAF ネットワーク「地域を変えるソフトパワー—アートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験」，青幻舎，2012.

加藤種男「芸術文化の投資効果—メセナと創造経済」，水曜社，2018.

小崎哲哉「現代アートとは何か」，河出書房新社，2018.

（3）グッゲンハイム美術館ビルバオ（スペイン）～美と食を通じた新しいまちづくり～

1) ビルバオについて

スペインはヨーロッパでも有数の観光地であり、1992 年のオリンピックを機に観光に注力したバルセロナは 2026 年に完成予定の「サグラダファミリア」はじめ建築家・A.ガウディの作品の恩恵により市の人口（約 160 万人）の約 20 倍が訪れる観光都市に

成長したことで知られる¹⁾。

バルセロナから北に約 500km に位置するビルバオ市はスペイン北部の大西洋ビスケー湾に面するバスク州ビスカヤ県に属する人口 34.6 万人（2014 年）の都市²⁾である。ビルバオ市は近郊で鉄鉱石が採掘されたことから産業革命以降鉄鋼業が発展し〈鉄の街〉として繁栄した。しかし 1980 年代になると鉄鋼施設の老朽化、ヨーロッパ共同体（EC）加盟に伴う産業構造再編が進んだことで工場閉鎖や移転が相次ぎ、また、失業率も 30%にまで上昇し極度の社会不安に陥っていた。同時にビルバオ市を横切り鉄鋼業を支える水運としての役割を果たしたネルビオン川は、水質汚染が悪化し環境汚染が深刻な問題として横たわっていた³⁾。

「環境か経済か？」という今日の環境問題にもつながるこの命題に対して、欧州の多くの都市がそうであるように、1980 年代後半ビルバオ市は環境と経済を再生するために舵を大きく切る³⁾。

2) グッゲンハイム・ビルバオ

ソロモン・R・グッゲンハイム美術館（1959 年開館）はアメリカニューヨーク市にあり、近代建築の 3 巨匠の 1 人フランク・ロイド・ライト（1867-1959）が設計した美術館であり、鉄鋼王であるソロモン・R・グッゲンハイムが設立した財団が運営する。グッゲンハイム財団はフランス・ルーブル同様に世界分館構想を掲げ、グッゲンハイム美術館ビルバオ（1997 年開館）はその一つである。

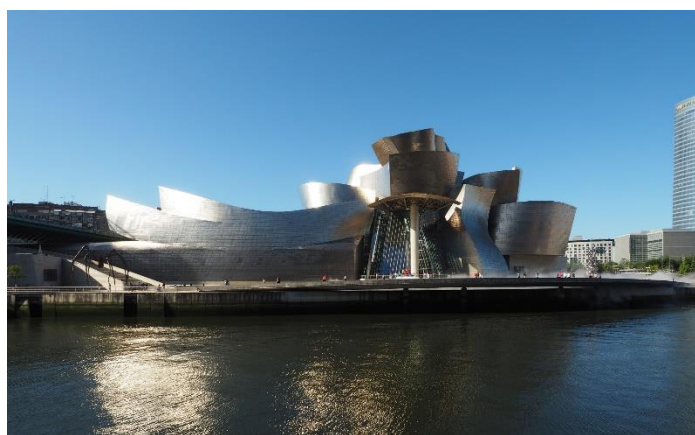


図 27 グッゲンハイム美術館ビルバオ

ビルバオ市は、1991 年に都市再生計画「ビルバオ・メトロポリ 30」、1992 年に実行組織「ビルバオ・リア 2000」を編成し都市の構造改革に乗り出し、1992 年にグッゲンハイム財団とグッゲンハイム美術館ビルバオ設立の合意協定を結んだ。ビルバオ市が立てた都市再生計画の骨子は、製鉄や造船所が集積したネルビオン川岸の一帯を新たに再開発するものであり、その基幹がグッゲンハイム美術館ビルバオの建設である。重工業で発展した街を〈文化都市＝アートのまち〉に転換するものであった。

結論から言うと、ビルバオ市が取った都市再生戦略は、人口増・失業率低下・観光客増加・税収増加・環境再生など数多くのベネフィットをもたらしたことから〈グッゲンハイム効果 Guggenheim Effect〉や〈ビルバオ効果 Bilbao Effect〉と評価される。ま

た、美術館の運営手法としても、著名作家の作品を収集（コレクション）して目玉とする手法を取らず、美術館が立地する地域であるバスク州やビスカヤ県に由来する作家や作品を収集する〈サイトスペシフィック Site-Specific¹⁾〉と、〈コミッションワーク Commission Work²⁾〉と呼ばれる手法を活用したことなど、21 世紀の新しい美術館運営のロールモデル³⁾を示したといえる。



図 28 館内の最大の展示室作品「The matter of time (Richard Serra 作)」は建築家 F.O.ゲラリーの建築空間と敷地がかつて製鉄所であった歴史から導き出されたインスタレーションである

3) サン・セバスチャン

ビルバオ市から長距離バスにのり大西洋に向け小 1 時間移動すると人口 18 万のまちサン・セバスチャンにたどり着く。2018 年夏にグッゲンハイムを訪れた筆者を含め、ビルバオ詣でを叶えた観光客が必ずと言ってその足で訪れるのがこの街である。サン・セバスチャンは古くからスペインではバカンスの街として発展してきたが、1990 年以降この街の料理人によって始められた〈ヌエバ・コッシーナ Nueva Cocina〉と呼ばれるあたらしい食を志向する運動によって美食の街として世界に発信されるようになった。

〈分子調理法 molecular gastronomy〉は、調理による食品変化を分子レベルで解明することで、料理の世界に新機軸をもたらしたと言ってもよいが、こうした潮流の発信源となったのがサン・セバスチャンであった。サン・セバスチャンの中心街の横丁には、スペインの伝統料理タパスやバスクの伝統料理ピンチョスのミニチュア料理である〈コッシーナ・エン・ミニアトゥーラ〉の居酒屋が集積し、これを求めて、世界中から集まった観光客はお店を複数梯子 Bar Hopping をして各店の特色が楽しむのがこのまちの過ごし方である。

八戸市も 2002 年の東北新幹線開業以来、古くから栄えた横丁がもたらす魅力が観光客を魅了し続けてきた。本年 11 月に八戸市美術館が開館すると街に新しい人流が発生することを見据え、美術館を訪れた後の中心街での過ごし方を今から準備しておきたい。その一つの提案として通常手のひらサイズの南部せんべいの小判に、八戸ならではの食

材を乗せた〈ちゃっこいはづのへまんま（小さい八戸メシ）〉を各飲食店で開発し、美術館の後に市民や観光客がお店をホッピングして横丁めぐりを楽しむまちの過ごし方を提案したい。



を提案したい。

図 29 サンセバスチアンの町並みとバルの様子。横丁には多くのバルが集積。お店ごとに特徴の異なるピンチョスを楽しむためホッピング（はしご）を楽しむ。

注

- 1) 芸術作品やプロジェクトの性質を表す用語で、その場所に帰属する作品や置かれる場所の特性を活かした作品、あるいはその性質や方法を指す。
- 2) 委託制作のこと。場所や環境、クライアントの要望に合わせて新たに制作した芸術作品。
- 3) 2008 年に開館した十和田市現代美術館は、1 展示室に 1 作品を配置したコミッションワークによるものであり、また、展示室をガラス張りとし街の風景と一体化することでサイトスペシフィック性を追求している。

参考文献

- 1 東洋経済オンライン：バルセロナが「観光客削減」に踏み切る事情，<https://toyokeizai.net/articles/-/164660>（閲覧日 2021.9.21）
- 2 ウィキペディア「ビルバオ」：
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%93%E3%83%AB%E3%83%90%E3%82%AA%E4%BA%BA%E5%8F%A3>（閲覧日 2021.9.21）
- 3 渡部哲郎：スペイン・ビルバオ「都市再生」，横浜市立大学論叢社会科学系列 60 巻 2-3 号，pp.385-426，2009
- 4 高城剛：人口 18 万の街がなぜ美食世界一になれたのか，祥伝社，2012

（４）遊休施設の再活用事例 – 大館／尾道（百島）／桐生／日光

1) アートと場の関係

まちづくりにおけるアートの活用は様々な自治体で行われ、その目的に応じ、現場で行われるアートも多岐に渡る。これは、アートの多面性が、地域が抱える課題へ多面的

に対応できることを意味する。よって、アートとまちづくりを語る際に、しばしば<どのようなアート>を用いるべきか、といった議論がなされる。たとえば、どのような作品が市民に好まれるのか、絵画が良いのか、現代美術が良いのか、それとも演劇やダンス、パフォーマンスといった作品か、などであり、しかし、この時に気をつけなければならないのは、それらアートが<どのような場>で行われるのか、ということである。このように<アートと場の関係>が、まちづくりへと派生的に展開していくための重要なポイントとなるであろう。

本項では、いくつかの事例を参照しながら、<アートと場の関係>に見る、遊休施設の再活用としてアートが有用であることを明らかにしたい。

2) まちづくりのために：ゼロダテアートプロジェクト（秋田県大館市）

秋田県大館市は、秋田県内では最も青森県に近く、青森県弘前市との経済的・文化的なつながりも大きい。県庁所在地である秋田市にはアクセスが決して良いとは言えず、人口の流出、経済の停滞は著しい。

この大館市において、2007年にスタートしたアートプロジェクトとして、ゼロダテアートプロジェクト（以下、ゼロダテ）がある。ゼロダテ初回となる2007年は大館市の町地区の商店街および元百貨店「正札竹村」を会場として利用し、ゼロダテの立ち上げメンバーである中村政人¹ら美術家の作品を展示した。

ゼロダテの目的は「DATE（日付）をゼロにリセットし、新しい大館を創造する²」というネーミングの意図とも重なり、衰退する地方都市の再生に向けたアートとしての試みである。その際に、かつて市の中心部におけるシンボルのひとつであった元百貨店「正札竹村」の一時的な活用は、目的を明瞭に表すものであったと考えられる。しかしながら、「正札竹村」の活用はこの初回のみにとどまり、以降、旧館の解体（2010年）を経て、再活用案も模索されたが、2019年に建物すべての解体が行われた。

ゼロダテによる試みは成功していないように思えるが、しかし、以降も廃校となった小学校の再活用、旧映画館の再生と、大館市内の様々な遊休施設の代替的な利活用を行い、また、ゼロダテの発足を契機に、大館市在住の若手や市外へと離れた出身者らによる人的ネットワークの形成が進んでいる³。

当初、有形であった元百貨店の再生は幻となってしまったが、無形である人的ネットワークの構築がゼロダテにおける成果のひとつとなっている。

3) アートのための受け皿として：アートベース百島（広島県尾道市）

ゼロダテには、若手や大館市在住・出身のアーティストによる表現の探究といった側面があるものの、それらは地域の再生といった目的へと帰結する。その地域の再生が意味するところは、遊休施設の多面的な再活用、そしてそれを実現するには人的ネットワークが必要であるということだ。これに対し、より、アートに比重を置いた試みとして、

¹ 美術家：秋田県大館市出身、東京藝術大学教授、アートNPO ゼロダテ代表、3331ArtsChiyoda 統括ディレクター、コマンドN 主宰

² 熊倉純子【監修】「アートプロジェクト 芸術と共創する社会」2014, p.182

³ 石山拓真「ゼロダテの「この街と歩く」から「自分で みんなで この街で」に続いていくこと」<https://www.nettam.jp/column/46/>（最終閲覧日：2021年9月21日）

広島県尾道市におけるアートベース百島を挙げる。

アートベース百島は、ディレクターを勤める美術家・柳幸典⁴のライフワークとして、アートセンターの体も成すアートプロジェクトである。瀬戸内海に浮かぶ百島の廃校を拠点に、島内の旧映画館や役場跡、その他に尾道市内の港湾倉庫といった、大小規模の異なる施設・空間を再活用し、これらの多くは、柳のほか、原口典之⁵ら美術家による大規模な彫刻やインスタレーション作品が常設されている。

アートベース百島がアートセンターとしても機能し、半ば美術館と同様であると仮定すれば、なぜ、美術館そのものの建設へと至っていないのだろうか。これは、過疎化の進む離島である百島の活性化という側面もあるが、柳や原口らの作品性にも起因している。

柳の作品には、政治的なメッセージ性を強く含むものもあり、それらは公立美術館においては常設化しづらく、原口の作品もまた、社会的な意図とともに、扱う素材も廃油など従来の美術館では常設はおろか一時的にでも展示することが難しい。それだけでなく、大規模化していくインスタレーション作品は、その展示・収蔵におけるスペースの確保、企画展などの一時的な展示の際の設置や撤去の費用も膨大となる。

すなわち、美術館がアートのすべてを受け入れられるのではないことと同時に、美術館が受け皿となることのできないアートのために、その実現の場として様々な遊休施設の再活用が有効に働くのである。

4) サイトスペシフィック／サステナブル／オルタナティブ：桐生再演(群馬県桐生市)／WATARASE Art Project (栃木県日光市)

アートベース百島における、アートの側から遊休施設の再活用を欲する視点は、アートそのものの多様化にも起因する。

現在、現代美術とされる作品の多くが、インスタレーションと呼ばれる作品展示形態を持つ。インスタレーションとは、作品を設置すること、の意味であるが、その設置状況に工夫・趣向を凝らすことで、作家の制作意図を伝えようとするものである。言い換えれば、作品の設置状況が変われば作品コンセプトは破綻するのであり、また、ごく限られた固有の作品設置状況でなければ、意図が成立しないといった作風を持つこともある。これらは、サイトスペシフィックアートなどとも呼ばれ、つまりは<その場所でなければ見ることのできない作品>となるのである。

群馬県桐生市は、足利氏による室町政権成立の過程で京都から織物の技術が伝わり、以後、特に明治～昭和後期に至るまで、日本の織物・テキスタイル産業を支えた地域である。市内には特徴的なノコギリ型の屋根を持った織物工場⁶が多数現存し、また、郊外には二階部分の天井が高い養蚕農家の構造を持った家屋が残るが、織物および製糸も斜陽産業となって久しく放棄された物件も少なくはなく、そもそもの場としての再活用が地域における重要な課題であった。

⁴ 福岡県出身、広島市立大学准教授（2005年～2015年）

⁵ 神奈川県出身、美術家

⁶ 通称：ノコギリ屋根

この桐生市で 1994 年に始まった桐生再演⁷は、市内の多数の織物工場を一時的に再活用し、前述の柳や原口らと同世代の美術家が多数活動を行っていた。その作品の多くは、織物の町といった地域性や、織物工場という構造を利用したものなど、地域固有のコンテキストに因んだものであり、サイトスペシフィックな意味・意図が強い。

1980 年代～1990 年代にかけて、バブル景気を背景に、銀座の画廊を中心に絵画など商業的な美術が活性化していた。しかし、裏を返せば、売買が成立しづらい作品形態を持ったアートは価値を見出されづらく、そのため、地方都市は当時の若手アーティストらの「疎開先」となったのである。このことで、衰退しつつある地方都市の様々な遊休施設がアートにより価値を見出され、アートもまた、商業的価値のみに縛られることなく実験性の高い表現の探究が可能となったのである。

桐生再演は、その副題に「街における試み」と冠していたが、その試みは、アートの側としての美術市場に対する試みであったと同時に、当時の若手アーティストらに織物工場などを解放した地域の人々による再生へと向けた試みでもあった。

桐生再演は、2004 年に織物工場を拠点としてリノベーションし、これまで 1 年に一回であった一時的な作品展示から、造形ワークショップなども含めた通年での恒常的な活動へと展開する。2005 年に当時大学生であった数名の若手を加え、翌 2006 年には、桐生市から栃木県日光市足尾町へと至る、わたらせ渓谷鐵道沿線地域へと範囲を拡大する。しかし、わたらせ渓谷鐵道沿線地域での活動は、そのまま WATARASE Art Project（以下、WAP）として 2006 年の実施⁸を境に分離・独立する。なお、筆者（皆川俊平）は 2005 年の桐生再演に参加し、以後、WAP を実施してきた。

桐生再演は、サイトスペシフィックであった活動が、拠点形成によるサステナブルな活動へと変わろうとしたが、しかしこのことで、同地を来訪・滞在する美術家らには拠点を維持するための経費負担が大きくなった。反面、WAP は、その拠点は地域住民有志による無償提供で、桐生市も含め多くの地域を対象に活動を拡大した。特に、かつて足尾銅山のあった日光市足尾町での、足尾駅駅舎に隣接していた廃車両の利活用<図 30>、旧鉾田住宅群<図 31>や廃校などの一時的な利活用<図 32>を通し、地域コミュニティとの連携を深めていく。

一時的な利活用、遊休施設の本来の使用とは異なるオルタナティブな再活用方法の提案は、先に挙げたゼロダテとも共通し、アート本来の創造性を如何なく発揮するものである。また、これらはステークホルダーを広げるとともに連携を深め、実験的なアートをまちづくりとしての活動へと発展させるものであろう。

⁷ 群馬県立近代美術館「群馬の美術 2017-地域社会における現代美術の居場所」2017, p.132

⁸ 群馬県立近代美術館「群馬の美術 2017-地域社会における現代美術の居場所」2017, p.134



＜図 30＞廃車両をキャンプ施設へと活用した「渡良瀬 CampingTrain」
 （©Shumpei Minagawa・Rina Hizatate / 2006-2008）



＜図 31＞旧鉾夫住宅群を活用した作品展示 （©Nana Izaki / 2012）



＜図 32＞廃校を活用した作品展示（©Azusa Uno / 2010）

5）文化の産業化：アートとその諸活動を維持すること

ここまでに挙げた事例は、多くが、絵画や彫刻といった既存の表現形態に縛られず、かつ場との関係性の上で成立する、現代美術におけるひとつの傾向を表している。また、これらが、遊休施設を再活用する、まちづくりにおけるアートの有用性を示してもいるが、しかし、課題となってくるのは、拠点の維持や複数の場を活用し続ける経費負担である。

ゼロダテは、アート NPO ゼロダテとして法人化し、またアートベース百島は作品常設によるアートセンター化や宿泊等を伴ったコンテンツ化を図ることで、アートを維持するための採算を図っている。しかしながら、それぞれに団体代表者である中村、柳ら美術家の私財投入が不要とまで言える状況ではない。

また、桐生再演および WAP は、行政による支援が滞れば、活動規模を維持・拡大していくことは極めて難しい。無論、行政や各種文化財団による支援は、ゼロダテやアートベース百島にも行われているものであり、アートをまちづくりとして活用していくには、行政の支援は不可欠である。そしてこの課題から見えてくることは、未だ、アートそのものには地域の中で自主・自律的に採算を図るのが難しい市場的な脆弱さがあり、文化行政による支援のみに依存することなく、いかに、文化を他の分野と連動させ産業化を図るかが重要である点を見逃すことはできない。

（5）MEBICーアート×ものづくり（ビジネス）

1）MEBIC とは何か

MEBIC とは、Media Business Innovation Center の略称で、大阪市のクリエイティブ産業を支える中核的産業支援施設である。大阪市内で活動するクリエイター同士やクリエイターと企業等を「顔が見える関係」を築くためのコミュニティづくり、競争とコラボレーションによる新たなビジネスや価値が生まれる環境づくりに取り組んでいる。こ

ここでいう「クリエイティブ」(分野)とは、デザイン、イラスト、アニメーション、ライティング・編集、広告企画、IT、ファッション、写真、映像、音楽、出版、印刷、建築などをいう。

2) MEBIC の役割

第一に、大阪のクリエイターが活動しやすい事業環境を創出すること、第二に、大阪のクリエイターの自立と成長を促進することである。目先の売上や利益などの短期的視点ではなく、大阪のクリエイティブ産業が活発かつ永続的に事業を継続できるよう、中長期的視点で支援活動に取り組んでいる。特に、今後の大阪を担う若手クリエイターの成長・支援を重視している。

3) MEBIC の目標

第一に、「仲間を創る」ことである。信頼関係に基づく人と人の異分野ネットワークを構築することである。第二に、「仕事を創る」である。大阪における新事業創出、潜在市場発掘、他地域からの仕事の誘致等、新たなビジネスを創出することである。以上を通して、第三に、「未来を創る」ことである。大阪のクリエイター自体が自分のやりたい仕事をやり続けられる地域経済環境を構築することである。

4) MEBIC 設立の政策的背景

先述したように、ここで対象となる業種はデザイン、イラスト、アニメーション、ライティング・編集、広告企画、IT、ファッション、写真、映像、音楽、出版、印刷、建築などであるが、これらの産業集積は、事業所数で 14,535 件、従業者数で 201,954 人である。

クリエイティブ産業を振興する意義は、第一に、新事業創出、既存産業の高度化・付加価値化をもたらすサポーティング・インダストリーとしての意義であり、第二に、企業や商品の広告宣伝力強化、ブランディング、付加価値向上に貢献するものである。難解な技術やサービスを可視化し、わかりやすく伝えたり、創造性溢れるコンテンツにより、人々の生活を便利に豊かにするなど、地域に集積が不可欠な重要産業の一つである。

大阪のクリエイティブ産業が直面する課題は、第一に、「大阪には仕事がない」という強い潜在意識の存在である。これにより東京等の他地域に移転する傾向がみられる。第二に、デジタル化の進展による良質なコミュニケーションの希薄化である。第三に、クリエイティブ産業自体の業務細分化と、クリエイティブマーケットの複合化とのミスマッチである。第四に、大阪のクリエイティブポテンシャルに対する低い認知度である。

5) MEBIC 流マッチング

MEBIC では、直接紹介、メーリングリストの活用、クリエイター募集プレゼンテーション、(非公開の)クリエイティブクラスターミーティング、クリエイターが集まるイベントへの参加、などである。

6) 活動成果

MEBIC をきっかけに生み出されたコラボ事例の件数は、2003 年から 2018 年までで金額にして 7 億 6,052 万円、件数で 1,039 件である。

(6) レッジョ・エミリア・アプローチ (イタリア) (アート×教育)

八戸市新美術館の掲げるテーマ「種を蒔き、人を育み、100 年後の八戸を創造する美

術館～出会いと学びのアートファーム～」にとって、『教育』の視点が最も重要だと考える。社会のグローバル化が進み、日本でも 21 世紀スキルやアクティブ・ラーニングについての議論が盛んになってきている。学校教育の中でも、主体的な学びが求められており、イノベーションを起こせる人材の育成は喫緊な課題だ。これからの社会に必要な「表現力やコミュニケーション能力」「探究心」「考える力」を養うためには、幼児期に遊びを通じて能動的な学びが求められる。

世界が驚嘆した乳幼児教育「レッジョ・エミリア・アプローチ」を紹介する。1991 年、米国の週刊誌『ニューズウィーク』により、幼児教育における国際的なロールモデルとして挙げられた。1998 年から「子どもたちの 100 の言葉」展が世界各国で開かれ、日本ではワタリウム美術館において 2001 年に開催され一大センセーションを引き起こした。米 Google の社員が利用できる預かり保育にも、レッジョ・エミリア教育が取り入れられるようになり、教育者からの関心も高く世界中から研修に訪れ、教育法が観光に繋がりまちづくりの核となっている。

レッジョ・エミリアは、イタリアの北部エミリア＝ロマーニャ州のボローニャ駅から急行列車で 40 分の場所にある人口約 17 万人の中規模都市である。ファシストやナチスドイツの侵略に対して最後まで抵抗した都市であり、街の中心広場には第二次世界大戦中にレジスタンス運動で殉死した人々を讃える記念碑が建てられている。戦後、市民はファシズムに加担したローマ・カソリック協会の幼稚園に子どもを通わせることを拒んだ。そして、根本的な街の再生のためには幼児期からの教育が重要であるとして幼児学校をつくった。その精神が、現在のレッジョ・エミリア市の街ぐるみの教育に繋がり、2 度と戦争を起こさないための教育の礎となっている。この乳幼児教育の改革を推進し、世界最高水準の教育へと高めたのが元小学校教師であり教育思想家のローリス・マラグッツィ（1920～1994）である。

イタリアといえば、歴史ある観光地や美術、サッカーやファッション等が思い浮かぶが、殊に豊かな食文化は特筆すべきものだ。レッジョ・エミリア市では、パルミジャーノ・レッジャーノ・チーズやバルサミコ酢、ワインも有名である。これら地場産業の 60% が個人経営で、家族みんなが従事している。また、教育の充実や発展を支えているのがファッションブランドのマックス・マウラだ。世界各国に店舗を持ちながら家族経営を保ち「マラモッティ財団」を設立し、利益の一部を乳幼児教育に寄付することで社会に貢献している。レッジョ・エミリア市の地場産業は、子どもたちのために世代間の循環性の重要性を掲げ実践している。

そして、教育を支える重要な施設の 1 つに<レミダ>と呼ばれる創造的リサイクルセンターがある。①サステイナビリティ（持続可能な社会づくり）②クリエイティビティを育てる③リサーチする（素材を採求する）、この 3 つを目的とした市の文化的な施設で 1996 年に設立された。

新しいけれど製品にならずにお金をかけて捨てられてしまうもの（型を抜いた残りのゴム、切り落としの木材、布、プラスチック製品など）などの多種多様な素材が置かれ、子どもたちの学びの機会を提供している。不要品や廃材に素晴らしい価値を与え、「コミュニケーションと創造性を豊かにする文化的プロジェクト」と位置づけられている。この動きは、近隣のボローニャやフィレンツェにも広がり、創造性に満ち

た循環型共同体の実践が子どもの創造性と想像性を豊かにし、持続可能な教育を作り上げている。

※参考文献

佐藤学（監修）・ワタリウム美術館（編）「驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの幼児教育」，東京カレンダー株式会社，2011.

レッジョ・チルドレン（著）・ワタリウム美術館（編）「子どもたちの 100 の言葉 レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録」，日東書院，2012.

森真理「レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある乳幼児教育～」，フレーベル館，2013.

「保育ナビ第 4 巻第 12 号」（3 2014）一園の未来をデザインする 特集：レッジョ・エミリアに出会う」，フレーベル館，2014 年

アレッサンドラ・ミラーニ「レッジョ・アプローチ 世界で最も注目される幼児教育」，文藝春秋，2017.

（7）アート×マーケット

藤野他【2020】の中では、文化・芸術を活かしたコミュニティの活性化が、文化・芸術を活かしたまちづくりになるとの考えから研究がなされており、コミュニティ創生はアートのまちづくりを捉える一つの要素であるといえる。

他方で、近年マーケット（又はマルシェ、市など）を活用したまちづくりが各地で取り組まれている。鈴木美央『マーケットでまちを変える 人が集まる公共空間のつくり方』学芸社、2019 年では「マーケットはまちへの誇りや愛着、シビックプライドを高め、まちの担い手を増やすことができる」とありコミュニティ創生の手段としてまちづくりに活かされているといえる。

コミュニティ創生という共通したテーマから、アートとマーケットを掛け合わせた取組について事例を調査した。

他の事例を調査する前に、八戸ポータルミュージアムで実施されている「はっち市」もアートとマーケットが掛け合わされた取組といえるのではないだろうか。

「はっち市」はものづくり支援事業として 2011 年より実施されており、「はっちがちゃんな街になる」をコンセプトに八戸ポータルミュージアム全館を使用し 3 日間開催されるクラフト市である。全国から募集した 60～70 店舗が出店し、3 日間で 1.5～2.0 万人が参加する。作品出店の他、ライブ、トークイベント、ワークショップ等も実施されており、文化・芸術が来場者と出展者をつなぐ一端を担っている。

「はっち市」はマーケットにアートが組み込まれている形であるが、芸術祭の一環としてマーケットが開催されている事例が葉山芸術祭で開催されている「青空アート市」である。葉山芸術祭は神奈川県三浦郡葉山町で 1993 年より開催されている地域発住民主体の生活芸術祭である。葉山を中心に逗子から秋谷にかけてのエリアで、個人住宅、図書館、寺社、海岸、店舗等を会場に 4 月中旬から 5 月中旬にかけて 100 以上のイベントが開催されている。運営は有志による実行委員会制であり、芸術祭本体の予算は 200 万円弱。収入は参加費、寄付、自主事業収入と町補助金（30 万円程度）からなっている。その中で「青空アート」は主催事業として 1997 年より開催されており、森山神

社の境内参道を会場に約 80 店舗が出店している。

また、アートの視点でマーケットを実施しているのが、かめおか霧の芸術祭のプロジェクトとして取り組まれている「KIRI マルシェ」である。かめおか霧の芸術祭は亀岡市が事務局となり 2018 年からスタートしたもので、単なるアートイベントではなく、地域経済を生み出すアートマルシェや社会形成に繋がる芸術講座、環境をテーマにしたプロジェクトなどを通年で開催している事業である。その一環である「KIRI マルシェ」は作り手と出会い、実際に話をし、手から手へとものづくりがつながる学びと創造のマーケットを目指した 2019 年より取り組まれている。ご飯やおやつを楽しみながら、アートの展示やワークショップ、買い物を楽しめるものとなっている。30～35 店舗が出店する他、会いにくる芸術祭のキャッチフレーズにちなみ移動販売車により亀岡市内の直売所を回る取り組みも行っている。

最後に美術館が主催又は共催となり美術館敷地を会場としてマルシェを開催している事例を挙げる。山梨県立美術館及び文学館が主催となり開催している「ミュゼマルシェ」は「山梨のクリエイター文化を発信するイベントを」をコンセプトに 2015 年より敷地内にある芸術の森公園を会場にクラフト市等が開催されたマーケット事業である。また、酒田市美術館で 2019 年から開催されている「SAKATA アートマルシェ」は、酒田市と文化芸術振興プロジェクト会議とが主催で展示会やワークショップを開催している。

（８）「食×アート」「本×アート」

アートによるまちづくりの活動は、まちの日常にアートを取り込みながら、アーティストや地域の人々との新たな繋がりを創出することや、地域のアイデンティティの醸成、文化の多様化に対応した様々なコミュニティを築くための潤滑油的な役割を担うものであると考える。アーティストが持つクリエイティブな発想は、地域の新たな価値や、それまで関わりのなかったヒト・モノ・コト・場所などの新たな関係性をも生み出し、豊かな社会の形成に寄与するものである。

八戸市におけるアートが行き交うまちの構築として記憶に新しいのが「酔っ払いに愛を」（酔っ払いに愛を実行委員会 2009 年～）の取組である。市民のみならず、国内外からの観光客など、不特定多数の人が集まり賑わう八戸市のシンボリックな横丁文化にアートを投入することは非常に斬新で、八戸市としての文化醸成への新たなチャレンジを象徴する取組である。

一口にアートと言っても、作品を展示し鑑賞することだけがアートではなく、その定義は日々多様化している。近年のアートは活動が主軸のモノが多く、作品を生み出すまでの過程や、異なるジャンルで活躍する人材の交流により生まれる新たなコミュニティが、地域の活性化に繋がっていくものとする。アートと地域（活性化）は密接不可分な関係にあると言っても過言ではない。1つの出会いが新たなコミュニティを創出し、やがてその繋がりが大きな花を咲かせる、八戸市美術館が掲げる『アートエデュケーションファーム』は、八戸市の地域性に即した理念であると言える。また、八戸市の中心街において新たに誕生する美術館を核とし、文化の薫り高い八戸を象徴する施設である八戸ポータルミュージアムはっち、マチニワ、ブックセンターなど、魅力的かつ市民と

の関わりが深い施設との相乗効果による中心市街地の活性化が期待されるところであり、それぞれの魅力を十二分に発揮し、八戸市民のアイデンティティに訴えかける取組が必要である。

1) 『ごちそうアートトレイン』

地域に密着したアートプロジェクトの事例を紹介する。2015年にアーティスト中山晴奈氏と群馬大学および上毛電鉄による「ごちそうアートトレイン」というプロジェクトが実施された。文化庁の「大学を活用した文化芸術推進事業 美術館等と連携する地域アートプロジェクトを活用するアートマネジメント人材育成研修プログラム」の一環で、研修プログラムに参加した方へのヒアリングを重ねながら参加者それぞれの特技やキャラクターなどの情報を整理し、実際のイベントに落とし込むというものである。その結果、車内で地元食材を使ったコース料理を振る舞う移動レストラン、農家の方による食材に関する講座、地域の方が実際に車掌になる演出、途中駅でのジャズ演奏といった多様なコンテンツが盛り込まれ、地域の皆さんの「やりたい!」という気持ちが詰まったイベントが実現した。こういった地域の魅力を発見するイベントを企画するとき、地域の皆さんのお話を聞くと、初めは「ここは何もないから」と消極的になりがちだが、ヒアリングを重ねていくと、どんな地域でも食にまつわるコンテンツは必ず見つかる。そしてそれを起点にアイデアが広がっていく。また、こういったイベントの多くは、営利目的ではなく採算度外視で開催されるが、そうまでするのは「地域のアイデンティティ」の構築が非常に重要で、価値あるもの故である。じっくりと観察して魅力を形にしたという経緯は、地域の誇りやアイデンティティとなり、「またやろう」と自発的に行動する人材を生み出し、やがてコミュニティが形成されていく。このようなイベントを開催する最大の意義がここにある。(※以上引用 1)

八戸市では、「南郷アートプロジェクト」において、地域の人々の「人となり」と「風土」を感じさせる料理を味わう企画でふるさと南郷の魅力を発信したが、全ての人に共通するコンテンツである食を軸に地域が主体で行うアートイベントは、アーティストという表現のプロの手が加わることによって魅力の再発見を促し、地域のアイデンティティの醸成に繋がる。人とのつながりを生み出すプロジェクトは、万国共通で様々な相乗効果が生まれるものである。

※引用 1)

中山晴奈氏 2019年5月21日 アート×ツーリズム(後編)「食×アート 見えない繋がりを可視化すること」

<http://www.toppan.co.jp/nippongallery/editimgnippon/event/006.html>

2) 『Public Collection』

次に、アートと本にまつわる事例を紹介する。米国のインディアナポリス公共図書館とアーティスト Rachel M Simon が協力し、市民の教養の向上と地元の芸術家への感謝を捧げるために、アーティストがデザインした無料のミニチュア図書館を街のあちこちに設置するという取組である。アートや本は、人生の羅針盤となって行先を照らして

くれることがある。街中のあちこちに設置されたアートには、どれも本の共有ライブラリが埋め込まれている。市民たちは、モニュメントのようなミニ図書館を探し、偶然に発見して、無料で本を借り返却する。

2015年にPublic Collectionは、9名の地元アーティストにブックステーションの製作を依頼し、作品を市内の様々な場所に設置した。設置されたステーションの場所はWebサイトのマップで公開され、市民は探索に赴くことができる。サイトスペシフィックなブックシェア・ステーションは、インディアナポリス公共図書館から提供された多様な利用者が興味を持つ様々な本を保管し、幅広い年齢層に対応している。

Public Collectionの公共図書館ならではの「読書×アート」の取組は、都市デザインのなかでもとてもユニークなアイデアである。本やアートとの偶然の出会いによる、知識と意識、文化やインスピレーションが街を循環し、コミュニティにも力を注いでいる。

※以上引用2)

プロジェクトをコーディネートしたSimon氏がプロジェクトを通して伝えたいのは、「文学やビジュアルアートはみんなのものだ」ということである。「本やアートは、コミュニティのみんなで共有されるべき」と考える人が増えてほしいという願いが本プロジェクトに込められている。「本を手にとる上で、バリアや邪魔になるものは一つもない。そして、どんなバックグラウンドをもっているのか、階級やステータス、人種などはまったく関係ない。誰もが街を歩いて気軽に本を手に入れることができる。私にとってこれは非常にワクワクすることである」と語っている。 ※以上引用3)

アーティスト一人ひとりがどんな人々にどのようにアートや本を楽しんでほしいかを表現した作品は、斬新かつ洗練されたデザインで街を訪れる人々の目を引く。1つ1つの小さな図書館は、本を借りるだけではなく、モニュメントとしての図書館を表現した作品である。八戸市の文化の薫り高いまちを象徴するブックセンターは、まさにこの小さな図書館と同様にコミュニティの創出や地域のモニュメント的な役割も果たす。図書館は人々に平等な知を提供し、ブックセンターはさらなる創造力やインスピレーションを与える場所である。文学・哲学等にとどまらず、時にはアンダーグラウンドなカルチャーにも柔軟に対応しうる革新的な場所は、人々にとって必要な場であり続けるだろう。洗練されたブックディレクションやその緻密に計算された知の本棚はアートの1つであると言っても過言ではない。人と人との出会いが人生に大きな影響をもたらすように、1冊の本や1つのアートが人生に思いもよらない刺激をもたらすこともある。新たな世界が広がる可能性を本とアートは秘めている。

※引用2)

未来ヨコハマカルチャー会議 2019年12月9日読書×アート。街で発見するミニ図書館「Public Collection」

<https://culture.yokohama/studies/1014/>

※引用3)

Haruka Mukai 2015年11月4日アーティストがつくりあげた、街中の小さな図書館「The Public Collection」

第3章 アート・新美術館を軸とした中心市街地活性化

1 ここまでの議論のまとめ

(1) 中心市街地の現状と課題

1) 現状

①都市機能の集積

文化・観光・スポーツの振興に寄与する公共施設が整備され、市民の文化・交流に関わる都市機能が集積している。

②文化交流施設の利用状況

施設ごとの利用者数に減少傾向が見られるなか、コロナ禍の影響もあり、令和2年度は大幅な減少となった。

③歩行者通行量の推移

通行量は減少傾向であり、特に平日と休日の差がなくなっている。平成20年度以降、文化交流施設の開館以降に通行量が増加し、来街機会・回遊性の向上への効果が見られた。

④滞在人口の推移

滞在人口は休日より平日が多く、平日は17時にピークを迎える。平日の16時から19時の時間帯では、10代以下の滞在人口が他の年代よりも多い傾向が見受けられる。

2) 課題

①来街機会の変化への対応

中心市街地の来街・滞在人口は休日型から平日型へ移行しており、そこを取り巻く情勢の変化に来街機会も対応していることから、これを多角的に捉え対応していくことが求められる。

②滞在機会の多い10代への働きかけ

10代の若者が少なからず滞在しており、これを好機として活かしながら中心市街地活性化に寄与する事業への若者の参加を促すことが重要である。

③文化交流施設の活用と連携

文化交流施設の整備に伴い創出される来街機会を活かすため、来街効果を持続させるための仕掛けや仕組みづくり、各施設が連携できる取り組みが必要である。

(2) アートのまちづくり—8つの事例

1) 大地の芸術祭 アートトリアンナーレ

<概要>新潟県十日町市・津南町を舞台に3年に1回開催される国際的芸術祭であり、制作された作品を活かすため、季節ごとのイベントも開催している。

<効果>ゴミの不法投棄の減少、アート要素を取り入れたパッケージデザインの変更による土産品の売上増加、移住者・起業家の増加

2-1) 本八戸駅通り「光のプロジェクト」 アート×まち育て

<概要>美術家安岐理加氏によるプロジェクトであり、市内で子どもを中心としたワー

クショップを実施し、リサイクル工作で風車を作成し、延百数人の参加者により三八城公園にインスタレーション作品として展示し鑑賞会を実施した。

＜効果＞参加した学生の貴重な経験を創出するとともに、アーティストと地域住民の創造的交流が生まれた。

2-2) 「まちのうわさ」→「まちぐみ」への展開 アーティスト×八戸

＜概要＞アーティスト山本耕一郎氏による取り組みであり、氏が自ら商店等に出向いて取材を行い、マンガの吹き出しのようにデザインされた無数の「うわさ」をまちじゅうに展示するものである。

＜効果＞このプロジェクトに興味を持った市民が自主的に制作作業に参加したこと、アーティストが持つ創造性と実践的エネルギーによって、「何か楽しそう」な取り組みを持続的に発信したこと、「まちぐみ」は氏を中心に集団として開かれた求心力を発揮していることである。

3) グッゲンハイム美術館とビルバオ アート×滞在

＜概要＞重工業で発展した街を、「文化都市＝アートのまち」に転換するべく、製鉄や造船所が集積したネルピオン河岸の一体を再開発する計画の基幹事業として美術館建設が位置付けられた。

＜効果＞人口増、失業率低下、観光客増加、税収増加、環境再生

4-1) ゼロダテアートプロジェクト アート×遊休施設

＜概要＞人口流出、経済に停滞が著しい大館市において、かつての市中心部におけるシンボルであった百貨店「正札竹村」を会場として利用し、美術館の作品を展示した。

＜効果＞市内在住の若手や市外へ移住した出身者らによるネットワークが構築された。

4-2) アートベース百島 アート×遊休施設

＜概要＞美術家柳幸典のライフワークとしてアートセンターの体をなすアートプロジェクトであり、公立美術館での常設が難しい大規模彫刻や政治的メッセージ性を含むインスタレーション作品を展示した。

＜効果＞美術館の受け皿となり得ないアートの実現の場として遊休施設の再活用が有効に働いた。

4-3) 桐生再演 アート×遊休施設

＜概要＞市内の多数の織物工場を一時的に再活用し、同世代の美術家が多数活動した。作品の多くは織物の町という地域性や織物工場の構造を利用した。地域固有のコンテキストに因んだものでサイトスペシフィックな意味合いが強いものである。

＜効果＞地方都市の遊休施設の価値が見出され、実験性の高いアート表現探求が実現した。

4-4) WATARASE Art Project アート×遊休施設

＜概要＞前記「桐生再演」において桐生市から栃木県日光市足尾町へ活動範囲を拡大したもの。廃車両の利活用、旧鉱夫住宅群や廃校などの一時的利活用

＜効果＞本来の用途と異なる遊休施設の利・再活用の提案により、アート本来の創造性を発揮し、ステークホルダーとも連携を深め、実験的なアートのまちづくり活動へ発展

した。

5) MEBIC アート×ものづくり (ビジネス)

＜概要＞大阪市のクリエイティブ産業を支える中核的産業支援施設であり、大阪市内で活動するクリエイター同士や企業等において「顔が見える関係」によるコミュニティづくり、競争とコラボレーションによる新たなビジネス価値を生む環境づくりに取り組んでいる。

＜効果＞これをきっかけに生み出されたコラボ件数は 2003 年から 15 年間で 1039 件、金額に換算すると 7 億 6052 万円である。

6) レッジョ・エミリア・アプローチ アート×教育

＜概要＞元小学校教師であり教育思想家のローリス・マラグッツィ (1920～1994) が世界水準へと高めたメソッドである。第二次世界大戦後、ファシズムに加担した教会の幼稚園に子どもを通わせることを拒んだ市民が、根本的な街の再生のためには幼児期からの教育が重要であるとして幼児学校を設立。→現在のレッジョ・エミリア市の街ぐるみの教育に繋がっている

＜効果＞不要品や廃材に価値を与え、「コミュニケーションと創造性を豊かにする文化的プロジェクト」として近隣都市にも広がり、持続可能な教育を作り上げている。

7-1) 葉山芸術祭 青空アート市 アート×マーケット

＜概要＞葉山市で開催されている住民主体の芸術祭の一環として開催されている。個人住宅、図書館、寺社、海岸、店舗等を会場として 4～5 月にかけて 100 以上のイベントを開催している。

7-2) かめおか霧の芸術祭 KIRI マルシェ アート×マーケット

＜概要＞地域経済を生み出すアートマルシェや社会形成につながる芸術講座、環境をテーマとしたプロジェクトを通年で開催している。作り手とのコミュニケーションを通じて、手から手へものがたがりがつながら学びと創造のマーケットを目指している。

7-3) ミュゼマルシェ アート×マーケット

＜概要＞山梨県立美術館と文学館で開催されている、「山梨のクリエイター文化を発信するイベント」をコンセプトとしている。2015 年より美術館敷地内の芸術の森公園を会場にクラフト市を開催している。

8-1) Public Collection アート×本

＜概要＞公共図書館とアーティストラッセル・シモンが協力し、市民の教養の向上と地元芸術家への感謝の気持ちを表現するために、アーティストがデザインした、無料のミニチュア図書館を街中に設置したサイトスペシフィックなブックシェアステーションは、多様な利用者が興味を持つ様々な本を保管し、幅広い年齢層に対応している。

＜効果＞まちなかにおいて、本・アートとの偶然の出会いが、知識と意識、文化やインスピレーションが街を循環し、コミュニティの形成にも力を注いでいる。八戸市のブックセンターにおいても、コミュニティの創出や地域のモニュメント的な役割を担ってお

り、創造力やインスピレーションを与える場所である。洗練されたブックディレクションや緻密に計算された知の本棚もアートの1つであり、アートと本の相乗効果が発揮される取組が必要である。

8-2) ごちそうアートトレイン アート×食

＜概要＞アーティスト中山晴奈氏と群馬大学および上毛鉄道によるプロジェクトであり、参加者それぞれの特技やキャラクター等の情報を整理し、イベントに落とし込んでいく。この結果、地元食材をつかったコース料理を振る舞う移動レストラン、農家による食材の講座、途中駅でのジャズ演奏、地域の方が車掌になる演出など、地域の方が実践したい多様なコンテンツが売り込まれたイベントが実現した。

＜効果＞複数のヒアリングを重ね、食にまつわる地域のコンテンツを発掘した。地域のアイデンティティが構築され、活動を継続するために自発的に行動する人材を生み出した。これにより、新たなコミュニティが生まれた。

(3) 提言の方向性を考える 1

以下の叙述は藤野他【2020】に依っている。

1) 文化・芸術は「まちづくり」における「かすがい」である

・文化・芸術を活かしたまちづくりにおいて自治体の方針等を示すことが重要である。その方針の中に、文化・芸術を活かしたまちづくりを明確に位置付けることで民間の団体も動きやすくなる。

・ビジョンを示すことで自治体の方向性を明確にし、計画を策定することで具体的に取組むことができる。

・アートは文化・芸術振興以外の事業に影響を与えることができる。

・アートを「かすがい」として、様々な「つながり」が生まれる。まず、「人と地域につながる」である。次に「地域の中の人と人のつながり」である。そして「地域の人と外部の人（アーティスト、来訪者、観光客等）とのつながり」である。これらの様々なつながりは、地域住民が自分たちの地域を改めて見直すきっかけや「自分たちの地域を、自分たちの手でどのようにしたいのか」を考える機会の創出につながっている。

2) 公共文化施設を核としたまちづくり

・公共文化施設のあり方として、「子ども・若者の興味・関心を高める取組」が重要である。幼いころから良質な文化・芸術に触れる機会があることは教育的な面からも大切である。

・次に、「社会包摂の理念に基づく取組の実施」である。多くの自治体でニートや引きこもり、子供の貧困が社会課題として浮上しており、これらの解決のために文化・芸術が生き辛さを感じている人々に自己肯定感を取り戻す取組や、家族で感動体験を共有することで、家族のコミュニケーションを活発にする取組などを行う。

3) コミュニティの創生から活気あふれるまちづくり

・萩市では、「まちじゅう博物館」とする取組において、まちの財産を的確に把握し大切にす視点と、NPOを主体とした取組の推進手法、人材面での工夫が見られた。

・「文化・芸術」には、人の感性や五感に働きかけ、人を動かす力がある。その「人を動かす力」を最大限に発揮し、コミュニティの活性化や活気あるまちづくりを行なってい

くために何が必要なのかを考えたとき、「人を動かしたい」という意志と情熱をもって、主体となり得る「人」であることが判明した。

・文化・芸術の取組によって新たなコミュニティを形成し、また既存のコミュニティの活性化を図っていく。

4) 自分たちのまちにある地域資源の活かし方

・美術館でみるものだけがアートではない。近年アーティストが廃校・廃屋などを活用してアート空間を創り出し、まちなかでの作品展示や公演が行われている。また、アーティストが実際にまちに住んで作品をつくり、そのプロセスを公開しているケースもある。

・アートもまちづくりも同様に人と人のつながりが大事であり、まちづくりのきっかけの一つとして、芸術祭やアート活かし空き家再生といった手法は有効である。

・アーティストによる新しい目線によって地域を読み直すことで、その土地の地域資源や特性を活かした作品が出来上がる。そしてこれをアーティスト個人で制作するのではなく、住民たちと協働で制作することによって、住民が自身の住む地域の魅力を再発見し、地域の強みを認識するという効果も期待できる。

・空き家や空き店舗などを現代アートの手法を利用し、リノベーションすることでコミュニティ内のコミュニケーションをとることができる。文化・芸術を活かし次世代のコミュニティを確立することが、空き家問題における一つの解決方法となり得る。

・地方創生の今後の重要なターゲットの一つに、交流人口が挙げられる。その増加を促すために「インフルエンサー」（特に感受性の豊かな若年層や女性、個人客など）の存在が重要である。そうした人々に向けて、既存の地域資源の中から新たな魅力を創出する手段としてアートの力が注目されている。

・次に関係人口も重要である。アートとは、「作品そのもの」だけでなく制作プロセスやその後の変化をも多分に含む表現方法である。住民と滞在制作するアーティスト、さらには移住者が共通して、自分自身が関わって地域を良くしていこうとする「シビックプライド」や「地域アイデンティティ」を醸成することが、豊かなコミュニティを形成または再構築していくことになる。ここで重要なのは、様々な分野の人々が集まることにより、それぞれの得意分野を生かすことがから発生する多様性である。

(4) 提言の方向性を考える 2

1) アートのまちづくりを展開するにあたり、市民に温度差があることが課題である。その温度差を埋めるため「食」などの広い間口を持つコンテンツと掛け合わせた施策展開が考えられる。

2) 中心市街地の場の特性として、①文化スポーツ施設が集積している、②空き床など遊休施設を有する商店街である、③横丁など「カオス性」を許容できるなどが挙げられ、これらとアートの特性を掛け合わせ、中心市街地と連携した施策を展開する必要がある。

3) アートのまちづくりを継続的に進めるための要素として、①目的の明瞭化、②牽引できるアーティストの存在、③経済性への展開、④イニシアティブの確立などが考えられる。

4) 八戸ではこれまでも官民の多様なアートプロジェクトが実施されてきたが、パフォーマンスなど形に残らないものが多く、これらを「消えものアート」と定義して、それ

らを可視化し、芸術祭のような形で展開できないか。

5) これまでは来館者や参加者などを評価指標としていたが、アートプロジェクトは必ずしも人流だけで評価されるものではなく、新たな評価指標による検証を検討してみてもどうか。

6) アートのまちづくりを展開するにあたり、アート面とまちづくり面が必ずしも双方利益の関係とはなり得ないことに留意しなければならない。

(5) 提言ー (仮称) はちのへまちなかアートプロジェクトの開催

1) 事例の考察と八戸市における取り組み

これまでに挙げた事例を俯瞰すると、アートのまちづくりとは、必ずしもアートにばかり重点を置いているのではないことが分かる。例として、事例③におけるグッゲンハイム、また、事例⑧・2における「ごちそうアートトレイン」などは、食との関連性が深く、アートを目的に参加・鑑賞する人もいれば、食が主目的化することもある。すなわち、アートのまちづくりとは、本来アートが好きな人、またまちづくりに興味・関心がある人だけでなく、それに付随した様々な要素に関心のある人がターゲットに加わり、ステークホルダーが拡大することが特徴である。

八戸市でも、このような事例に相当する取り組みはすでに行われている。

八戸市是川地区で行われた「是川縄文アートプロジェクト」は、是川団地の活性化を目的とした「是川〈地域の底力〉実践プロジェクト会議」で2020年に発案され、『むつ小川原地域・産業振興財団』のプロジェクト支援助成事業と地域の方々の寄付により実施に至った。2020年は、是川団地中央公園内にある経年劣化した全長37mのコンクリート壁を再生するための壁画制作を行なった。壁画は市民から公募により原画が集められ、是川縄文館の専門的監修をもとに、アーティスト佐貫巧氏（現代芸術教室アトイズ主宰/八戸学院大学短期大学部 准教授）が図案化、制作は八戸学院大学短期大学部の学生らが行なった。なお、壁画の公募には、是川縄文館での学習を行うことが定められ、是川縄文遺跡および発掘物への理解を深めるきっかけとなっている。

2021年には「北海道・北東北の縄文遺跡群」がユネスコ世界遺産への登録が決定し、同年のアートプロジェクトでは、前年度に制作した壁画と是川縄文館をつなぎ、是川地区の様々な箇所を周遊するトレイルを実施した。

是川縄文アートプロジェクトの取り組みには、無論、アーティストが介在しているものの、実質的にはアーティストによる作品を見るのではなく、市民や学生が深く関わった作品、地域の史跡や郷土資料、そして街並みと自然の鑑賞・体験に主眼が置かれている。この場合のアート（壁画）の役割は、これまであまり省みられることのなかった是川地区の景観への気づきをもたらす仕組みとなっている。

2) 「(仮称) はちのへまちなかアートプロジェクト」

加藤種男氏の言葉を引用すると、「地域芸術祭ではアーティストの作品制作において住民が欠かせないパートナーとなって」いるとともに、「必ずしも専門的な表現手段を持たなくても」アートプロジェクトに市民が参画することで、「想いを表現する」ことができる。また、是川縄文アートプロジェクトのように、美術館の中で額装された絵画、

展示台の上でスポットを浴びる彫刻のような、アーティストがつくった「純然たるアート」だけがアートとは限らない。

これを踏まえて、あらためて8つの事例を参照し、八戸市中心市街地を舞台・フィールドとする「(仮称) はちのへまちなかアートプロジェクト」の構想を提言する。

「(仮称) はちのへまちなかアートプロジェクト」の構想に向けた8つの骨子

- ① 地域の課題を解決するために、企画立案から市民が参画し、構想と準備・実施・検証の段階を経るために数年程度の間を開け、定期開催とする（事例①）
- ② 市民と関わる取り組みを実施可能なアーティスト、また地域在住のアーティストと市民との協働的な取り組みを実施する（事例②）
- ③ 中心市街地とその他の地区、また八戸圏域といった広域的な連携を図り、周遊・滞在型の鑑賞・観光スタイルへとつなげていく（事例③）
- ④ 空き家・空き店舗・遊休施設を、その時・その場所でなければ見ることのできないアートを実施する空間として利活用する（事例④）
- ⑤ 地域の産業と連携し、ものづくりを活性化、新商品企画やデザイン等のブラッシュアップを図り、販路の確保までを包括的にマネージする（事例⑤）
- ⑥ 地域の幼稚園・保育園から高等教育機関まで、アートプロジェクトを学びの場として提供し、主体性を育む共創的な教育を推進する（事例⑥）
- ⑦ 民芸や手芸作品などのマルシェにより、市民の誰もがアートプロジェクトの当事者となると共に、中心市街地の既存施設間（はっち、ブックセンター、マチニワ、南部会館、長根公園・YSアリーナなど）との連携を促進する（事例⑦、⑧）
- ⑧ 中心市街地の横丁の風情も、アートとしての価値へと転換する（事例③、⑧）

「(仮称) はちのへまちなかアートプロジェクト」の構想の実現のためには、ひとつとして新しく何かを生み出す必要はなく、すべて、本来的に中心市街地に備わっている魅力を『ひとつながり』の円環にするだけで創りあげることが可能である。また、実施には多種多様な人材を必要とするが、アートのみに特化した人材を育成することは決して急務ではない。それよりも、アートをマネージする意欲を持った人材、アートと中心市街地の諸要素をつなぐことのできる人材を育成することが必要であるが、市民参画によるアートプロジェクトが継続すること自体、人材育成の場としての意義も持つ。そしていずれはアーツカウンシルにも相当する仕組みとして機能することが可能である。

「(仮称) はちのへまちなかアートプロジェクト」の提案は、これまでも十分に実施可能なものであったはずだが、八戸市新美術館のオープンの以前と以後では大きく性質が異なる。美術館が中心市街地において「純然たるアート」を担保できるようになったため、事例として挙げた複合的なアートが、市民にとってより身近なアートとして受け入れやすくなってくると共に、アートを活用する視点の醸成も美術館オープン以前より期待することができる。例として、八戸三社大祭やえんぶりといった伝統的な行事も、美術館による現代アートなどがあることにより、それら祭の持つ伝統性による創造的価値があらためて明らかとなっていくのであり、「(仮称) はちのへまちなかアートプロジェクト」は、中心市街地の多種多様な魅力に、新たな視点での価値を付与していくもので

ある。

3) 補論：専門的アート人材の育成と組織化

補論として、アートプロジェクトを実施するための人材および組織に類する事例として、アーツカウンシル等について述べる。以下の叙述は太下義之『アーツカウンシル アームスレングスの現実を超えて』水曜社、2017年（以下。太下【2017】）に依っている。

文部科学省【2007】によれば、最も歴史の長い英国を事例として、アーツカウンシルとは「美術、演劇、音楽、文学などの団体あるいはプロジェクトに助成金を支給する公的機関」であり、「経済的援助を行うだけでなく、芸術教育、芸術経営、スポンサー探し、企業とのパートナーシップにおいて積極的な役割を果たしているほか、専門的な立場から地方自治体と協力して、芸術活動の活発な実現に尽力」する組織である。こうして、「英国においては、美術、演劇、音楽、文学などの振興については、アーツカウンシルが中心的な役割を果たしている」。

2011年12月に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針（第3次基本方針）」を受け、「独立行政法人日本芸術文化振興会において専門家による審査、事後評価、調査研究の機能を大幅に強化し、諸外国のアーツカウンシルに相当する新たな仕組みを導入する。このため、早急に必要な調査研究を行うとともに、可能なところから試行的な取組を実施し、文化芸術活動の計画、実行、検証、改善（PDCA）サイクルを確立する」とした。

そして同振興会は2012年度から2015年度までの5年間、文化芸術活動への助成に関する新しい審査・評価の試行的取組、いわゆる「日本版アーツカウンシル」を始動させた。その中核は、プログラムディレクター（PD）及びプログラムオフィサー（PO）（後述）を活用した審査体制であり、PD及びPOは調査研究にもとづき運営委員会などに対し情報提供を行うとともに、審査・評価の結果を文化芸術団体にフィードバックする体制である。以下では、日本国内の主なアーツカウンシルの事業内容について説明する。

①アーツカウンシル東京

アーツカウンシル東京では、助成を通して芸術文化活動を支援し、芸術創造環境を整えていく「支援事業」、人材育成事業や観光・地域活性化と連動した事業等、先駆的な事業を実施する「パイロット事業」、さまざまな調査研究、海外ネットワークづくり等により、芸術文化環境を整え、シンクタンク機能を充実させる「企画戦略事業」の3つの事業を展開している。

②沖縄版アーツカウンシル

沖縄版アーツカウンシルは、文化芸術分野の専門家で構成されるアドバイザリーボードを設置し、寄り添い型のハンズオン支援（課題を抱える諸組織などを対象に経験豊富な専門家を派遣し、さまざまなアドバイスを提供すること）を行うプログラムオフィサーを配置している。アドバイザリーボードは、事業の選定及び評価・検証、プログラムオフィサーはハンズオン支援や相談業務のほか、県内の文化芸術の活動状況を踏まえた助成制度の構築を行っている（この項は、<https://www.okicul-pr.jp>、2022年1月10日アクセス、による）。

③大阪アーツカウンシル

大阪アーツカウンシルの主要事業は、大阪府・市の文化課が担当する文化事業の評価と改善提案、大阪府・市による公募型助成金の審査を行う「評価・審査」事業、文化を育てる環境づくりに向けたベースとなる情報を収集し、発信する「企画・調査」事業である。

④アーツカウンシル新潟

アーツカウンシル新潟の主要事業は、第一に、文化芸術活動に対する助成及び助成事業に対するアドバイスや相談、マッチング等の活動支援を行う「文化芸術活動の支援」、第二に、新潟市の文化政策に係るシンクタンク機能（文化芸術関連調査、政策研究、人材育成、啓蒙など）を担う「調査・研究」、第三に、情報の蓄積、支援事業等の一体的な情報発信を行う「情報発信」、第四に、新潟市及び新潟市関連機関の文化芸術事業に対する、助言・提案、企画運営支援、支援や調査研究に基づく政策提言を行う「企画・立案」である。

⑤アーツコミッション・ヨコハマ

（公財）横浜市芸術文化振興財団の部署として設置されているアーツコミッション・ヨコハマの主要事業は次の4つである。第一に、実験的な芸術表現や横浜ならではの都市文化を生み出すような活動に対する助成を通して、横浜で芸術創造や発表を行うアーティストやクリエイター等の活動サポートと横浜での芸術機会の創出、社会における芸術や創造力の役割の拡張を行う「芸術文化支援」である。第二に、主にアジア諸都市との間で一定期間横浜に滞在し作品制作を行うことを通して、海外の若手アーティストを横浜に紹介するとともに、日本の若手アーティストに対して海外での滞在制作機会を提供する交流事業である「アーティスト・イン・レジデンス交流事業」である。第三に、アーティストやクリエイター等の滞在や制作場所、発表スペースの創出を目的に芸術と社会をつなぐ仕組みである「芸術不動産」や創造産業の誘致等を通してアーティストやクリエイター等の制作環境を整え、横浜が創造性あふれる人材の集う場となることを目指す「創造まちづくり支援」である。第四に、横浜に活動場所を設けたい、作品制作や発表をしたい、会場を探している等、横浜で活動するにあたっての疑問や相談に対応する「相談業務」である。

⑥アーツ・コンソーシアム大分

アーツ・コンソーシアム大分は、大分県、大分県芸術文化スポーツ振興財団、県立大分芸術短期大学の三者で協定締結をおこなって生まれた組織である。主な事業領域は、調査研究、さまざまなプロジェクトの説明責任を果たすための評価手法の調査と試験的な検証、人材育成などを担うことを想定しており、大分版アーツカウンシルにつなげていくことを想定している。

⑦あおもりアーツカウンシル

これまでの事例は、都道府県単位でのアーツカウンシルの事例であるが、我が県では青森市でアーツカウンシルが組織されている。

あおもりアーツカウンシルは、一般財団法人青森市文化観光振興財団を事務局に、幅広い芸術活動を行う市民により組織されている。「地域の文化的資源に新たな光を当て再構築し、さらに質の高い独自の文化芸術の創造を推進することで魅力あるまちづくり

を進めていくことを目的に⁹」し、さまざまなイベントの実施や、アート系人材を web サイト上で紹介するほか、AOMORI トリエンナーレ（青森市制 100 周年事業として 1998 年に開催した『青森版画トリエンナーレ』を前身とする）を行なっている。

他の事例と比較し、アートマネジメントやアートプロデュース、また文化事業のコーディネートといった側面より、地域人材の活躍の場を広げる自主事業が主だったものであり、また事業は市町村単位の小規模なものであるが、市民が主体的に事業を実施する取り組みとなっている。

しかしながら、市町村単位という規模ゆえ他市町村など広域に波及しづらい側面や、本来から芸術文化活動を行う一部の市民が事業実施者となることで、そのような文化的活動に従事していない市民へと関心が拡大しにくい、すなわちステークホルダーを拡大させていく側面では課題があるといえる。

⁹ あおもりアーツカウンシル - 事業概要 <https://aomori-artsCouncil.jp/about>

おわりに

本研究では、第一に、八戸市の中心市街地の現状と課題を明らかにし、第二に、アートのまちづくりについて説明し、8つの事例を紹介した。第三に、アートと新美術館を軸とした中心市街地活性化について、「(仮称) まちなかアートプロジェクト」の実施、を提言した。美術館によるアートと、中心市街地のさまざまな魅力を掛け合わせた複合的なアートプロジェクトを展開していくことは、多様なステークホルダーを巻き込み、アートはまちづくりへ、また、まちづくりはアートへと包摂される。それと共に、この有様が八戸市の中心市街地の新しい日常となっていく。

<引用・参考文献>

第1章

八戸市『第3期八戸市中心市街地活性化基本計画』、2018年

八戸市『令和2年度 八戸市中心市街地活性化基本計画の定期フォローアップに関する報告』

八戸市『平成29年度都市計画基礎資料』

八戸市『新美術館管理運営基本計画』、2019年

八戸市『新美術館基本設計』

八戸市『新美術館中期運営計画』

ヤフー・データソリューション DS.INSIG

第2章

藤野他【2020】藤野一也他『基礎自治体の文化政策』水曜社、2020年

河村信治「八戸市中心市街地活性化市民ワークショップと八戸ポータルミュージアムに関連するまち育て活動」2010年度日本建築学会大会(北陸)都市計画部門研究協議会論文集, pp.82-85, 2010年9月.

猪股希美『本八戸駅通り「光のプロジェクト」の評価に関する研究』平成23年度八戸工業高等専門学校建設環境工学科卒業研究, 2012年3月.

生田尚志・堀越まい・佐藤将之「中心市街地活性化を目的とした拠点施設の運営と市民集団の活動展開による参加の形態ー八戸市によるポータルミュージアム「はっち」と市民集団「まちぐみ」を事例としてー」日本建築学会計画系論文集, 85巻777号, pp.2363-2373, 2020年11月.

経済産業省：街元気・まちづくり事例集ー新たな雇用と投資の喚起をめざしてー (ver.1.0), 2017年3月

https://www.meti.go.jp/policy/sme_chiiki/town_planning/downloadfiles/h28_jirei.pdf

藤本智士(文)・浅田政志(写真)『アルバムのチカラ』赤々舎、2015年.

映画「浅田家!」の原案『アルバムのチカラ』再び AERA.dot 2020/09/26

<https://dot.asahi.com/dot/photoarticle/2020092300098.html?page=2>

宮前良平『復興のための記憶論：野田村被災写真返却お茶会のエスノグラフィー』大阪大学出版会, 2020年.

北原啓司『「空間」を「場所」に変えるまち育てーまちの創造的編集とはー』萌文社, 2018年.

藤浩志・AAF ネットワーク『地域を変えるソフトパワーアートプロジェクトがつなぐ人の知恵、まちの経験』青幻舎、2012年.

加藤種男『芸術文化の投資効果ーメセナと創造経済』, 水曜社, 2018年.

小崎哲哉『現代アートとは何か』河出書房新社, 2018年.

東洋経済オンライン：バルセロナが「観光客削減」に踏み切る事情, <https://toyokeizai.net/articles/-/164660> (閲覧日 2021.9.21)

ウィキペディア「ビルバオ」:

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%93%E3%83%AB%E3%83%90%E3%82%AA#>

%E4%BA%BA%E5%8F%A3（閲覧日 2021.9.21）

渡部哲郎：スペイン・ビルバオ「都市再生」，横浜市立大学論叢社会科学系列 60 巻 2-3 号，pp.385-426，2009 年

高城剛：人口 18 万の街がなぜ美食世界一になれたのか，祥伝社，2012 年

熊倉純子【監修】「アートプロジェクト 芸術と共創する社会」2014 年

群馬県立近代美術館「群馬の美術 2017-地域社会における現代美術の居場所」2017 年
佐藤学（監修）・ワタリウム美術館（編）「驚くべき学びの世界 レッジョ・エミリアの
幼児教育」，東京カレンダー株式会社，2011 年

レッジョ・チルドレン（著）・ワタリウム美術館（編）「子どもたちの 100 の言葉
レッジョ・エミリアの幼児教育実践記録」日東書院，2012 年

森真理「レッジョ・エミリアからのおくりもの～子どもが真ん中にある乳幼児教育～」，
フレーベル館，2013 年

「保育ナビ第 4 巻第 12 号」（3 2014）一園の未来をデザインする 特集：レッジョ・エミ
リアに出会う」，フレーベル館，2014 年

アレッサンドラ・ミラーニ「レッジョ・アプローチ 世界で最も注目される幼児教育」，
文藝春秋，2017 年

中山晴奈アート×ツーリズム（後編）「食×アート 見えない繋がりを可視化すること」

<http://www.toppan.co.jp/nippongallery/editimgnippon/event/006.html>、2019 年 5 月
未来ヨコハマカルチャー会議 『読書×アート。街で発見するミニ図書館「Public
Collection」』 <https://culture.yokohama/studies/1014/>、2019 年 12 月

Haruka Mukai『アーティストがつくりあげた、街中の小さな図書館「The Public
Collection」』 https://greenz.jp/2015/11/04/the_public_collection/、2015 年 11 月

第 3 章

文部科学省[2007]「平成 18 年版文部科学白書」

太下[2017]太下義之『アーツカウンシル アームスレングスの現実を超えて』水曜社、
2017 年

＜八戸市都市研究検討会＞
アート及び新美術館を軸とした中心市街地活性化に関する研究

■八戸市都市研究検討会

中 間 報 告 令和 3 年 10 月 12 日 (火)
最 終 報 告 令和 4 年 2 月 14 日 (月)

場所：八戸市庁舎

■作業日程

第 1 回会議	令和 3 年 5 月 28 日 (金)
第 2 回会議	令和 3 年 6 月 29 日 (火)
第 3 回会議	令和 3 年 7 月 27 日 (火)
第 4 回会議	令和 3 年 8 月 25 日 (水)
第 5 回会議	令和 3 年 9 月 24 日 (金)
第 6 回会議	令和 3 年 10 月 6 日 (水)
第 7 回会議	令和 3 年 10 月 28 日 (木)
第 8 回会議	令和 3 年 12 月 1 日 (水)
第 9 回会議	令和 4 年 1 月 11 日 (火)
第 10 回会議	令和 4 年 1 月 27 日 (木)
第 11 回会議	令和 4 年 2 月 7 日 (月)

場所：YS アリーナ八戸サテライトキャンパスほか

アート及び新美術館を軸とした中心市街地活性化に関する研究

2022（令和4）年3月31日発行

編集・発行 八戸市都市研究検討会

座長 熊谷 雄一（八戸市長）

委員 坂本 禎智（八戸工業大学長）

水野 眞佐夫（八戸学院大学長）

圓山 重直（八戸工業高等専門学校長）

＜地域資源のブランディングに関する調査研究プロジェクトチーム＞

高橋 晋（八戸工業大学工学部生命環境科学科 教授）

皆川 俊平（八戸工業大学感性デザイン学部創生デザイン学科 准教授）

河村 信治（八戸工業高等専門学校総合科学教育科 教授）

馬渡 龍（八戸工業高等専門学校産業システム工学部環境都市・
建築デザインコース 准教授）

田中 哲（八戸学院大学地域経営学部地域経営学科 教授）

佐貫 巧（八戸学院大学短期大学部幼児保育学科 准教授）

漆戸 悠人（八戸市まちづくり文化スポーツ部まちづくり推進課 主査）

福澤 沙紀（八戸市総合政策部市民連携推進課 技師）

（事務局）

玉川 哲也（八戸学院大学 教務学生課 主任）